特243
545

土屋元作著

戲曲

二宮尊德

臥雲草堂藏版

始

特243
545

土屋元作著

戲曲

一

宮尊德

目次

自序
眞道
尊德翁逝いて七十年
戯曲『二宮尊德』
偉人の追想
ロータリークラブ以前の大ロータリヤン

自序

曩に余戯曲「福澤先生」を書いた處、東京の帝國劇場は新國劇の一座をして之を舞臺の上に演出せしめた。其芝居を見物した横濱の野村洋三氏は二宮尊德先生をも戯曲にしては如何と余に勸められた。余卒然之に應じ、漫然筆を執り、戯曲「二宮尊德」六幕を大阪時事新報紙上に連載したのは、一昨々年の事であつた。今之を小册子に編するに當つて再讀するに、虎を畫いて猫に類するの拙を感じ、聊躊躇する所があつた。

二宮先生は、獨り貧を變じて富となし、禍を轉じて福と爲すの大經綸家なるのみならず、亦一圓順環の理貧富協賛の道を說き、人間界に不平無からしめんとした大哲人である。本戯曲未だ此二大教訓を說くに及ばざりしは、戯曲の性質上、餘りに局面の複雜錯綜するを好まなかつたからではあるが、二宮先生ほどの大豪傑は、素より一篇の戯曲を以て、其風采を髣髴せしめ得べき筈なく、更に幾篇の戯曲を要するのである。然し先生の人物識見は、此一曲によりても略々之を窺知することが出來やう、實に先生は我國空前の大經綸家であると共に、亦大思想家であつて、彼

の三浦梅園佐藤信淵の如きも、先生に比すれば何となく輪廓の小を覺ゆ位である。世人多くは先生を以て溫良恭謙なる君子風の人と想像するやうであるが、余の見る所では、先生は寧ろ磊落奇偉なる豪傑風の人である。支那人の說に「聖人儘是快然之人」と云ふが有る、先生は卽ち其快然の人で、聖人と言はれるも頗る其當を得たるものと信ずる、此點も亦此戲曲によつて略之を知ることが出來やうと信ずる。

本書刊行は友人上田寧君の厚意に因る、此に記して之を謝す。

昭和六年三月二十日

土屋元作

眞道

翁曰、夫眞の道は、學はずして自から知り、習はずして自から覺へ、書藉もなく、記錄も無く、師匠も無く、而して人々自得して忘れず、是ぞ眞の道の本體なり。渴して飲み、飢へて食ひ、勞れて寢ね、覺て起く、時此類なり。古歌に「水鳥の行くも歸るも迹絕わて、されごも道は忘れざりけり」といへるが如し。夫記錄も無く、書籍も無く、學ばず習はずして明かなる道に非れば、眞の道に非るなり。夫我敎は書籍を尊まず、故に天地を以て經文とす、予が歌に「音も無く香も無く常に天地は、書かざる經をくり返しつゝ」とよめり、此の如く、日々繰返し〳〵示さるゝ天地の經文に、眞の道は明かなり。斯る尊き天地の經文を外にして、書籍の上に道を求むる學者輩の論說は取らざるなり。能く目を開いて、天地の經文を拜見し、之を眞にするの道を尋ぬべきなり。夫世界、橫の平は水面を至れりとす、竪の直は垂針を至れりす、凡此の如き萬古動かぬ物あればこそ地球の測量も出來るなれ、是を外にして測量の術あらむやは曆道の表を立てゝ量を測る

の法、算術の九九の如き、皆自然の規にして、萬古不易の物なり。此物によりてこそ、天文も考ふべれ、暦法も算すべけれ、此物を外にせば、如何なる智者ゑ雖も、術を施こする方なからん。夫我道も亦然り、天言はず、而して四時行はれ、百物成る處の不常の經文、不言の敎戒、卽ち米を蒔けば米が生ゑ、麥を蒔けば麥の實るが如き、萬古不易の道理により、眞の道に基きて、之を眞にするの勤めを爲すべきなり。(二宮翁夜話)

編者曰く、二宮翁夜話は、翁の門弟福住正兄の筆記する所にて、能く翁の意を傳ふ、珍重すべき書なり。原本「眞の道」を「誠の道」と書す、誠と眞とは同一なり、今まぎらはしきを厭ふて、誠を眞に改む。

尊德翁逝いて七十年

(人道第二五四號社說)

報德一夕話著者　留岡幸助

天下國家眞の利益と云ふものは最も利の少き處にあり、利の多きは必眞利にあらず。

尊德

一

大正四年の夏故早川千吉郎氏と三週間北海道を巡遊中、石狩國瀧川驛邊にて英國の農村研究者スコット氏と車中で邂逅した、彼は當時我が全國を漫遊し、農村の狀態を調査して居たのであるその時種々話が我儕の間に湧いたのであるがスコット氏は私に問を發して云はれるやう、

大分英國の農村も調査しましたが、何か英語で日本の農村狀態をかいた書物はなからうか、

このことであつたから、私は友人好本督君の『日本農聖、二宮尊德の事業及生涯』なる一書を指摘した。所が氏は其れは先日或人から敎へられて一讀したが、實に有益な書物で近來あんな面白

い書物は讀んだことがない。とかう云つたのである。

二

またこの書物が一九一二年——大正元年——倫敦のロングマンス、グリイン、アンド、コンパニー書店で出版されると、英國の各雜誌や新聞に種々の批評や紹介が出た。その批評や紹介は私の手に來たの丈でも五十種ほどあつたやうに思ふ。どう云ふ風に批評し紹介したかと云ふに、或る新聞は尊德を露西亞のトルストイに比し、或る雜誌は伊太利の聖僧アシシのフランシスに比較した、而してどの新聞雜誌もが Usefull and interesting——有益にして趣味に滿ちて居る——と謂つたのである。而して此書物にはオックスフオードの哲人ゼー、エストリン、カーペンターが序文を書いて居るのである。著者好本督君は元早稻田大學英語の教師であつたが、當時私を訪ねて謂はるもには、

留岡さん私はあの報德記と云ふ書物を讀んで非常に感じました、而して私の力には餘りあるか知りませんが、之を生涯の事業と思ひ、英語に飜譯して見たいと考へるのである、何分宜しく願ひます。

このことであつた。其處で私は之が英語に飜譯されて廣く讀まるゝやうになれば、少しは日本人の魂も歐米各國人に分るであらうと考へ、大した助はせなかつたのであるが、私の出來る丈のことはした積りである。而して序文を求められたから左の An appreciation ——讃評——を書いた。

二宮尊德は一七八七年——天明七年——栢山村に生れ、一八五六年——安政三年——今市に歿した。七十年の彼の生涯は國家と國民の爲めに驚くべき犧牲を拂ひ、

而して絶にず當時の社會狀態と挑戰したのである。

彼に教師なし、若しありとせば天然自然は彼の其れである。

彼は麗はしき栢山村に生れた、其處には程遠からざる半空に富士が聳ゆ、相模灘に面しては國府津の美しき原野が開展して居る、其故に彼の歌に

音もなく香もなくつねに天地はかゝざる經をくりかへしつゝ

と云ふのがあるは、この景を見て思付たのであらう。

報德社は彼の最も必要とした社會的救濟機關である。該社は高尚な道德的目的を持つた信用組合(クレヂット、ソサエチー)である

而かもそれが獨逸のシュルチエー、デーリッチやライファイゼンの信用組合に先つこと二十年前であつたことは驚くべきことではないか。尊德は日本の歴史に於て鎖港攘夷の時代であつた封建の世に活躍し、而して至誠、勤勞、分度推讓を叫ばざるべからざる時代に於て、犧牲獻身の生涯を送つたのである。

三

幸田露伴先生は青年時代にあつて未だ人生觀の定らなかつた時、ふとしたことから富田高慶著報德記を讀み大に悟る所あり、此時から確たる人生觀を得たと云ふことである。それが爲に今を距る三十年前博文館の依賴により少年文學『二宮尊德』を著はし、當時洛陽の紙價をして高からしめたのである。之は何の爲であるかと云ふに青年時代に漂浪してまだ人生觀も定らなかつた時報德記によつて人生觀が確定したのであるから報恩の志を以て、如上の著述をしたのであるとは露伴先生自ら語る所である。

明治三十八年日露戰爭終りを告げ、國運發展民心作興した時、誰言ふとなく戰後の經營と云ふ事が矢釜敷なつた。そこで、官民を綜合した我倘一團の人々の間には、明治三十八年は二宮翁逝いて五十年なれば、道德經濟調和の道を唱道し、兼ねて之を實行した二宮尊德翁五十年記念會を開催し、大に道德經濟調和併行を宣傳しようと議一決し、明治三十八年十一月二月二十五日上野音樂學校に、一大講演會を催したのである。而して音樂學校大講演會の概況及び講師の講演は明治三十八年十二月二十五日『人道』第八號に掲載したのであるが、如上の如く私は幸田露伴先生が二宮翁の報德記につき人生觀を得られたと云ふことを聞いて居るから、人道社員を派して露伴先生に報德記を讀まれた前後の關係を聽かせたのである。その時先生の話は次の如くである。

四

報德教ですか、私などは方面が違ひますので、併し若い時に報德記を讀で非常に動かされたものですから、之に關する大抵の書物は繙きました。書物は讀みました。然し弱い碁打が向ふの強い碁打を批評しても甲裝のない話ですから、評論などの嗚呼の沙汰は罷めにして、たゞ事實談やら、感じ話を申上げませう。

と云うてその青年時代の心的狀態を語る。

さやう私が始めて報德記を讀みましたのは二十歲位の時でした。年もゆかず、心持も錬れて居ませず且色々の場合に遭遇して迂路々々して居た頃の事です。其頃この報德記を讀みまして大に愉快を覺ゑ、自分の體一つの强い力のある考が湧くやうな氣が致しました。勿論前々聖賢の敎。修身の書などを讀んで居なかつたでもありませんでしたが、しかし報德記は書かれた事實が非常に目の前の事で、しかも全篇事實を以て說明してある。——言葉を以て書かれた書物は多いが、この書のやうに事を以て敎へてあるのは至極稀です——而かも其の事が古代史の如く耳や眼や心やに遠い朧げなものでなく、自分自らの事か、さなくば親しい友人の事柄のやう、目の前に見ゑ、耳の側で囁かるゝのですから、深く身に滲み入つたのであります。

五

かやうに先生は語つて、さて報德記より受けた敎訓の次第を述ぶるのである。

その愛けた深い感じの第一は行ひをして堅實ならしめねばならぬと云ふのでした。人世は堅い確かな遣り口、誠意誠心一杯に張りつめた氣合を以て、弛みのない引き緊つた足取りで遠い途を行かねばならぬ事としみ〳〵感じました。

次に感じたのは過去の事に就て其非なることの悟られた曉には、未練なく思切て改めねばならぬと云ふ事でした。斷乎として過を改める勇氣——勇氣中の最も勇なるもの——之がなくてならぬと感じたのであります。人間は隨分失策をするものですが、翁の謂はれたやうに、芋を蓄へんとするに、芋に少でも腐があつたら、思ひきつて其腐れを切捨てねばならぬ、一大決心を振ひ起して所謂『懺悔の勇氣』を以て思ひ切り、そして未來に對しては確實な堅固な滿を持した行をせねばならぬ、と大に感じて讀み終つた時には曾て覺ゑない好い氣持がしました。

大に感じて報德記八卷を再三再四繰返へしましたが、後卷を措いて考へました。只此書中の事實を記し、前後を誦したとて何の益にも立たぬ。予は農業に志して居るのではない、此書を手より離して胸に持ち、其の形跡は學ばず、其の精神を學ばればならぬと、若い考だけに至つてつまらぬ平凡のことですが、當時は鋭く强く感じたのであります。

先生はかやうに敏感の次第を物語つて自分の受けた利益を他人へも頒ちたいと志し、

それからは事につけ、折に觸れて此書を手にもし胸にも抱いて、忘るゝ暇はありませんでした。曾に自分ばかりではなく、其の後當時の自分のやうな考へに惱でる人を見受けるにつれ、親疎の別ちなく、

此書を出して精讀を勸めたことは再三にして止みませんでした。

六

處が爰に不思議な事實があります。と申しますのは一體貸した本が中々返つて來ないものであります十が九迄は催促せねば戻らぬ。元來書物と云ふものは、文章でも詩の本でも、中味は尊いが價は安いのでうちやるのかして、催促してさへも返つて來ぬのが隨分あります。

處が面白いのは此の報德記だけは何時貸しても屹度返てくる。隨分深く知らぬ人にも貸すのですが、古くはなるが返て來ぬと云ふことはない、唯一昨年頃に至つて、貸し失つた形で未だに戻りません。が想ふに何かの事情の爲に滯てゐるので、屹度返て來るのだと、何となく斯う考へられて、私は一つの奇蹟のやうに感じて居ります。之は餘り外の書物にはない事です。大方報德記の中に含まれて居る烈々たる精神、誰にも讀んで投げやりにするに忍びないやうな感じをさせるのかと思ひます。

先生は如何にするごく報德記の靈化に浴されたかは、以上叙し來つたことによつて明かであらう。所が先生は更に金次郎幼年の環境を考へて、常人ならば金次郎はどうしても不良少年か、犯罪者にならねばならぬと、先生專門の立場より推理立案して、さて云ふやう、

七

それがら之は先日の會からの――この會は明治三十八年十一月二十五日上野音樂學校で開いた二宮翁五十年記念會のことを指すのである――歸途、私の職分の知惠から割出した考へですが、私の職分の方から申しますと、御存じの通り小說で御座います。小說と申しますと、人情の機微を觀察し、人事百行の分出する道程と理由とを勵へて、それからそれと書くのですが、この小說眼から二宮金次郎といふ者を小說として書くとすると、どうも事實上發展して來た他日の尊德翁を描く事は一寸出來ませんのであります。なぜならば、あの貧困窮苦の間に育ち、あの苛刻殘忍な伯父萬兵衛に養はれた金次郎は、系統上に若し其の血の中に異常な立派なものが流れて居るとか、或は一方に非常に暖かな力のある、或保護者が居て、愛の力を以てどうが善い方にと、熱心に彼を導くとかの事實がないならば、自然派や寫實派の方から云ふと金次郎はどうしてもあの樣な後年を齎すことは出來さうもないのであります。必ずやれぢけ切た不良少年となり、惡人となり、萬兵衛の家に火でも掛けて、燃へ上る火焰を眺め、手を叩てケラ〳〵と哄笑する一幕を出さぬと、どうしても一篇の小說が治まらぬやうでございます。

一體寫實といひ、自然と云ふのも妙なもので、惡くすると人間の卑い小さな狹い考で、此の測るべから

ざる世間のことを卑く小さく狹く描いて往かうとする傾向になる。殊に暗黑面にのみ目を着ける人達は人間は皆黑い煙ばかりでも吐いて居る者のやうに觀察するものもあるやうですが、さう黑烟ばかり吐いて居る人のみでは大變です。中には暖い芳ばしい氣を放つ人もあります。人生はさう狹くはありません尊德翁のやうな人も出て來ることがあるのです。

八

以上述べたやうに先生は小說本來の開展から金次郎の慘憺たる環境が產み出す經緯を細鋭して彼が將來は不良少年か若くは犯罪者にならねばならないのであるが、左はならずして、善道に進み萬人の師表となつたに就いては、金次郎の身邊を愛護した、神佛の加護がなくてはつゞまりのつかないのであることを、鋭利な觀察眼を以て述べて云はるゝやう、

想ふに二宮翁の幼時に於ては、あまり書いたものには傳つて居りませぬが、之を小說眼から見ますとどうしても何か非常に熱誠を捧げて、崇拜し、信仰し、目標として居た或者があつたかと思ひます。先日も五十年祭の席上で、古い〳〵大學を見た時深く感したのです、あの大學を不斷不絕繙いて居た、幼い金次郎の胸の中には、自分の境遇の苦しいにつけ、古聖人に對して、いひ知らぬ懷しい、慕はしい憧憬の念が燃にて、呪文でも誦するやうに、强い信仰の一念で此の聖經に對していたのではあるまいがと思つたのです。

又觀音經を讀んだのでも、どうも人間以上の或者を夢のやうに幼い心の中に認めて、それによりすがつて居たのではあるまいかと思つたのです。一體善良の子供と云ふものは不思議に人間以上のものを信賴し、景慕するものですが、四圍のつらかつた爲に金次郎のは一層鋭かつたものかと思ふのであります

九

報德記につき今一つの例を引くことを許さるゝならば左の事實がある。

遞信局長を止め母校靑山學院の爲に獻身して居らるゝのは、畏友籔內敬之助君である。同氏が帝國大學法科生であつた時、夏休を利用して函根宮の下の富士屋ホテルに働いて居た時の事だ。夕刻になると仕事がやゝ暇になるので、路傍に涼臺を構へて晩酌を傾ける大工があつた。徒然の折柄籔內君は其の涼臺に身を寄せ何にくれとなく世間話をしたのであるが大工籔內君に向つて、

大工、　御手前はホテルに働いて居るが小田原に居た二宮金次郎を知つて居るか。

籔内、　不束ながら二宮金次郎は知つて居る。

大工、　其の人のことを書いた報德記と云ふ書物があるが讀んだことがあるか。

籔内、　報德記のことは未だ承知して居ない。

大工、　さうかそんならば二里麓の小田原の書店に行けば賣つて居る、讀んで見給へ、中々爲になる書物である。

大工の勸により籔内君は大枚五十錢を拋つて報德記を購ひ、夏季休暇中通讀したが、苦學の身には大なる慰藉と教訓とを得たとのことである。露伴先生然り、籔内君然り、報德記を讀んで大なる教訓を得た人は此外にも數多からう。弘は西洋ではスマイルスの『自助傳』と東洋では富田高慶の報德記が最も有益なる書物であると思ふ。兩者は代る〳〵讀むべき書物ではなかるまいか

十

報德記は如何にして出來たか、二宮尊德の高弟富田高慶は、數多くある弟子の内でも最も優れた弟子であつて、孔子の門下にすれば顏回、基督のそれにすれば保羅の如き位置にある人だと思ふ。高慶思へらく報德の道は廣大無邊凡俗の能く後世へ傳へ得べきものでないと考へた末。當時「江戸繁昌記」を書いて令名のあつた寺門靜軒なれば漢學にも達し、文筆にも長けたれは尊德翁の道を後世に傳ふるに於て適任ならんと、只管靜軒が報德の道を傳へんことを乞ひ、材料一切を靜軒に提供してかゝしめたのである。而して出來上つた原稿を讀んで見ると文章にあやはあつたが、尊德翁の精神――報德の道――少しも紙面に活躍して居ない、そこで高慶思へらく報德の道を後世に傳ふるものは自分を措いて他にあるまいと、斯う考へた末野州湯西川の溫泉に一ヶ月籠居して、齋戒沐浴遂に不磨の書報德記一册を書きあげたのである。然し自ら任ずる厚き高慶すらも、斯道を筆して後世へ殘すには自分は甚だ不充分であることを自白して言ふやう、

――報德記の例言中に――

先生一世の言論功業之を筆記する者あらざれば富國安民の良法と雖も、一時に止りて永遠に及ばず。是我輩の大に憂る所なり。而して之を記せんと欲するに其一班をも窺ひ見る能はず、蓋し聖賢にあらざれば聖賢の心志を知る能はず、豈庸愚にして高德大才の蘊奥を知るを得ん。知らずして漫に之を記す果

して其大德を損するのみにあらず、其功業を以て區々たる平常の事に比するに至らん、是大に恐るゝ所にして、數十年間之を記する能はざる所以なり

と謙讓して更にその能はざる理由を述べて云ふやう、

然り而して博識高才と雖も先生の門に入らざれば亦記するを得ず、寧ろ其一端を記して以て識者の是正を待には如かざるなりと、已を得ずして其萬一を記す

と言へり。

斯の如くにして成就したものが卽ち報德記である。報德記は初め天覽に入り、宮內省にて有益の書なりと認め、之を農商務省に下賜され、農商務省は更に之を大日本農會に下附し、今では大日本農會が版權を所有するが故に刊行して居るのである。

報德記の關係する所に農事のみならず、之を擴張せば修身の要道であり、之を應用せば商工業其他百般の事業に適用せらるべきである。若し其れ尊德翁の主義と主張及報德の原理を實踐躬行せば社會問題の如きものには有効なる適藥である。何故なれば報德の道は推讓を敎へて勞資を協調せしめるものであるから、現狀を匡救するには妙藥である。報德は互に相讓り相扶けて協調をすゝめるのが尊德本來の精神である。若し社會問題に沒頭するものが謙讓の心を以て報德記と二宮翁夜話を熟讀するならば得る所少々ならざるを知るであらう。（大正十五年十二月十五日）

翁曰、世の中に用を爲す材木は、皆四角なり、然と雖も、天は人の爲に、四角の木を生ぜず、故に滿天下の山林に、四角なる木なし。又皮も無く、骨も無く、蒲鉾の如く、半片の如き魚あらば、人の爲便利なるべけれど、天之を生ぜず、故に滿々たる大海に、此の如き魚一尾もあらざるなり、（二宮羽夜話）

翁曰、夫人道は譬へば水車の如し、其形半分は水流に從ひ、半分は水流に逆ふて輪廻し、丸に水中に入るれば、廻らずして流るべし、又水を離れば廻る事あるべからず。夫佛家に所謂智識の如く、世を離れ欲を捨たるは、譬へば水車の水を離れたるが如し、又凡俗の教義も聞かず、義務も知らず、私欲一片に著するは、水車を丸に水中に沈めたるが如し、共に社會の用を爲さず。故に人道は中庸を尊む、水車の中庸は宜き程に水中に入て、半分は水に從ひ、半分は流れに逆昇りて、運轉滯らざるに在り、人の道も其如く、天理に從ひに種を蒔き、天理に逆ふて草を取り、欲に從つて家業を勵み、欲を制して義務を思ふべきなり。（二宮翁夜話）

戲曲　二宮尊德　大夢

第一幕　名主善兵衛宅の場

相州足柄上郡栢山村名主善兵衛宅に淨瑠璃の催しあり、村人男女大勢集る、善兵衛出て挨拶する。

善兵衛　是は皆さん好う來て下さつた、今度上方から珍らしく義太夫語りが小田原へ來た、私も好む道だから、皆さんと一所に聞きたいと思つて此催しを致しました、何もお構ひは出來ぬがごうぞゆる〳〵お聞き下さい

村人甲　有難う〳〵、善兵衛さんも義太夫節は巧かんべいが、上方の太夫は聞物だらう

村人乙　さうとも〳〵、善兵衛さんは好い道樂を持つて御座る、時に今夜は何を聞かして下さる

善兵衛　今晩は太閤記十段目、あすは義經千本櫻鮓屋の段でがす

村人丙　そいつは有難い「又二つには初菊殿」と來るね「夫の打死遊ばすを妻が知らいで何とせ

う」か、畜生

村人丁　なんだ變な聲を出しあがつて

百姓萬兵衛入來る

萬兵衛　善兵衛さん、今晩は有難う

善兵衛　萬兵衛さん、お出なさい、オヤ金公は

萬兵衛　ありやキ印だから、義太夫なんかは分りやしない、家で繩でもなつて居りやしよう

善兵衛　可愛さうに、連れて來てやれば好いのに

金次郎（二宮）十六七の子供、後から伯父の羽織著て出る

金次郎　善兵衛さん、今晩は有難う

萬兵衛　馬鹿、おれの口眞似なんか仕あがつて、そしてなんだ其姿はおれの羽織なんか著やがつて

金次郎　オヤ可笑しい、伯父さんは此間おれが居ても居なくつても、おれのする通りするんだぞ

と言つたじやないか

萬兵衛　ア、云ふ馬鹿だ、其辯口は達者だから仕方がねへ、お前に義太夫が分るものか、家へ歸つて繩でも綯へよ

金次郎　伯父さんに分れば俺がにも分る、すべて伯父さんの通りだから

村人甲　是ア好い

萬兵衛　歸れと言ふに、歸らねへか

善兵衛　まあ〳〵萬兵衛さん、さう言はずに、金公にも聞かせてやらうじやないか、金さん歸らないでも好い、聞いてお居で

金次郎　ごうせ拙からうが、聞いてやらうか

村人乙　矢ッ張りキ印だね、言ふ事が異つてる

萬兵衛　萬事あれだからね

善兵衛　靜かにして下さい、今太夫が出ますから

義太夫語り竹本理太夫三味線引鶴澤半平高座に上る

口上　東西々々、此處御聞に達しまする淨瑠璃外題、太閤記十段目、相勤めまする太夫は竹本理太夫、三味線鶴澤半平、先づは尼崎の段始まり然樣、東西々々

村人　イヨ口上々々

理太夫淨瑠璃を語る「殘る菅の花一つ云々内大臣春永といふ主君を害せし武智が一類、かく成果るは理の當然云々、不義の富貴は浮べる雲と云ふ所で、金次郎聲を掛ける

金次郎　其處だ、確り

口上　東西々々

村人甲　誰だ大きな聲をして、金公じやねへか

理太夫「主君を打つて功名顔、假令將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも劣るこは知らざるか主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立てば云々、もつさう飯の切米も百萬石に優るぞや

金次郎　其處だぞ、確かり

村人乙　アレ又大きな聲をして、金默つてろよ

理太夫見臺を片寄せ、一禮して

理太夫　エ、ごうも相濟みませぬが、未熟な私、餘り大きな御聲で喫驚致し、調子が外れました今晩は是で御免を蒙りたう御座ります

村人さわぐ善兵衛も當惑の體

萬兵衛　金次郎さあ此處へ出ろ、馬鹿め、なんで義太夫の邪魔をする、われの惡戯は伯父の耻だサア承知しねへぞ

村人丙　駄目だよ、キ印だから、子供じやねへか、萬兵衛さん

萬兵衛　イヤキ印でも子供でも、仕置をしなくつちやァ皆さんに申譯がねへ、ウヌ太へ野郎だ、ごうするか見ろ

金次郎　伯父さん何を云ふのだ、人が笑ふよ

萬兵衛　何だと

萬兵衛は金次郎を捕へ二つ三つ叩く

善兵衛　アレ萬兵衛さんどうしたものだ、金公に聞かしたのはおれだよ、お前が悪いわけはねへ

萬兵衛　イヤ相濟まぬ、飛んだ奴を甥に持つて、ヤイ出て失せろ、おれの家に置く事は出來ぬ、われのやうな奴は乞食にでもなれ

善兵衛　それは餘り可愛さうだ

萬兵衛　お前達が可愛さうだ〳〵といふから、此奴が一倍增長する、拋つて置いて貰ひたい

金次郎　伯父さん、わしが乞食になれば、お前は乞食の伯父だぜ

萬兵衛　エヽ忌々しい事をぬかしアがる、緣切つた、伯父と言ふな、甥とは思はぬ

金次郎　アトで後悔しねわか

萬兵衛　馬鹿、方圖が無い

金次郎　そんなら仕方が無い、赤の他人にならう、赤の他人さま、是までは大きに御厄介になりました、だが犬猫でも腹が減つてりやア人間は食物を分けてやるものだ、食はせてコキ使つた

ばかりでは、人の道と云ふものは立たねへ

善兵衛　金公伯父さんは今怒つてるおれに任せろ、悪い事は言はねへ

萬兵衛　善兵衛さん折角だが、おれには甥は無へのだ

金次郎　善兵衛さん折角だが、おれには伯父はねへさうだ、今に分るだらう

善兵衛　馬鹿、何が分るのだ、馬鹿

金次郎　赤の他人をさう悪く言ふこさも無からう、イヤ大きに長々お世話になりました

金次郎出て行かんとする

善兵衛　コレ金公、何處へ行く

萬兵衛　天竺へでも行つて仕舞へ

金次郎　おれは今其天竺から、豐葦原の瑞穗の國に天降つた所だ

善兵衛　恠しい事を言ふぜ

萬兵衛　アレがキ印の證據だハ、、、

金次郎飄然として去る

同返し　百姓伊助宅の場

金次郎　イス公居るか

伊助　オヤ金公ごうした

金次郎　萬兵衛さんから首尾好く追出された

伊助　ごうして追出された

金次郎　今夜善兵衛さんの所に義太夫があつたと思へ、太閤記十段目だ、おれが義太夫語りに聞かせ處を敎へてやつたら、未熟もので後が語れなくなつた、其處で萬兵衛さんが怒り出し、厄介者の金次郎を逐出したのさ

伊助　ウン今夜上方の義太夫を呼ぶと聞いたが、そんな事から伯父さんが怒つたか

金次郎　それが伯父でねへさうだよ

伊助　ハーン

義太夫語理太夫尋ね來る

理太夫　御免下さいまし

伊助　だれだ

理太夫　金次郎さんは此方に御出になりますか

金次郎　居るよ、ハ、ア來たな

理太夫内に入る

理太夫　是は伊助さま、金次郎さま、私は竹本理太夫といふ淨瑠璃語で御坐ります、一寸金次郎樣に御尋ね致したい事があつて參上致しました、先程太十を語つて居りますと「其處だ確り」との御掛聲、妙に腑に應へてあとが語れなくなりまして、面目次第も御坐りません、アノ掛聲はごう云ふわけで御掛けになりましたか、藝道の爲伺ひたく參上致しました

金次郎　ア、好い御心懸けだ、貴君は屹度上手になられる

理太夫　恐れ入ります

金次郎　分らなきア教へて上げやう、お前さんは何の爲めに義太夫を語りなさる、肩衣袴で高座に上り、人を眼下に見下し、女子供を喜ばすのが義太夫の本意じやあるまい

理太夫　ハイ

金次郎　人間に一番大切なものは義だよ、それを光秀の母が教訓する、太閤記十段目の魂は「不義の富貴は浮べる雲」「もつさう飯の切米も百萬石に優るぞや」といふ文句じやないか

理太夫　ハイ成程

金次郎　義太夫節の元祖竹本義太夫は、一生義に背くまいと誓ひを立て、義太夫と名乗つたといふじやないか

理太夫　是は恐れ入ました

金次郎　不義不正な道で富貴を得たものは、將軍でも大名でも尊ぶに足らぬ。野末の小屋の非人に劣る、なんでも人間は眞直な道を歩行いて行かねばならぬと云ふのが、マア一段の聞かせ所

聞き所だね

理太夫　成程々々

金次郎　だからおれが聲を掛けた「其處だ確かり」と、お前にはそれが分らなかつた、分らなかつたが、何となく氣にかゝるから後が語れなくなつたのだよ、人は大方キ印の金次郎の惡戯だ棄て置きねさいと言つたらう、それを關はず尋ねて來なすつたのは偉い、其心掛を忘れなさるな、乾度上手になれる

理太夫　是は好い事を伺ひました、有難う御座ります

伊助　出し抜けぢや喫驚するのも無理はねへ、此男は大變な異り物だから

理太夫　全く以て驚きましたが、今伺つたところは又結構な御話、理太夫も御蔭で好い學問を致しました、御禮を申上ます

理太夫歸り行く

金次郎　イヤ公暫く雨露を凌がしてくれ、アノ樣な所に長く居つては堪らぬと思つたから、仙了

堤の空地に菜種を植ゑたり、用水堀の空地に人の棄てた苗を植ゑて、チヤンと獨立の用意はしてある、追出されたを幸に、是から家を興す積だ、イス公承知か

伊助　おれの家に居るのは少しも構はぬが、お前本當に一本立が出來るか

金次郎　出來ねへでごうする、イス公おれは又面白い事を悟つたよ

伊助　それは又何だ

金次郎　此間飯泉の觀音堂で旅僧に逢ふた、普門品を讀んでくれたが、イス公觀音と云ふは慈悲の事だよ、一聲でも助け給へと云へば、好し來たといつて驅けつけるのが觀音とは面白いじやねへか、世間にはおれのやうな氣の毒な人間が澤山ある、おれは獨立して道樂に觀音をやらうと思ひついた

伊助　ハ、、、、相變らず大きな事を言ふが、人を助けるには情ばかりじや駄目だ、金が入るぞ、それはごうして拵へる積りだ

金次郎　イス公、金は畑からも湧く、海からも湧く塵も積れば山となる道理、ナアにそろ〳〵やれば好い、イス公それから又おれは面白い事を考へた

伊助　何だ

金次郎　經濟といふ事は「無から有を生ずる」事だと悟つた、假令ば此家だ、木や石を集めて造れば家が出來る、木と石を別々にすれば家といふものは有りはしない、世間の寶は皆人間の頭から湧いて出るものだ

伊助　金公ゑらい事を考へたなア

金次郎　さう思ふと此世界は極樂淨土だ、智慧を出して働けば働くほど、大きな觀香になれる、一首やつたよ、聞いてくれ

天津日の惠み積み置く無盡藏鍬でほり出せ鎌でかり取れ

伊助　手前の考へには兎ても敵はぬ、ほんとに今太閤だ、それほどの金公にも萬兵衛さんばかりは濟度が出來ねへな

金次郎　其處で佛も「緣なき衆生は度し難し」と云つた

伊助　縁なき衆生ごころか血の續いた伯父甥じやねわか

金次郎　伯父あれごも伯父の行ひを爲さゞれば無きに同じと云ふものだ、然し今に分るだらうよ

伊助　舜の父を瞽叟といふの類か

金次郎　オヤお前まだ蟲の喰つた本を讀んで、古人の寢言を覺わてるね

伊助　さう云ふ手前も大學を讀むじやねへか

金次郎　あれか、あれは唐の聖人は何樣な事を考へて居るかと思つて、開けて見たが、餘り違つた考へもねへから、モウ止めた

伊助　それでは今度は何を讀むつもりだ、まさか蘭學でも有めへ

金次郎　今ではおれば天地を讀むのだ、自然に規則があるそれを讀む、草木や石や土を讀むが面白いぞ、人間の書いたものなごは糟みたやうなものだ

伊助　大層な見識だなア

萬兵衛表に立聞き獨言

萬兵衛　逐出されて困つたゞらうと思へば、又此處へ來て大きな事を言つてる、手の附けやうが無い馬鹿だ

金次郎　赤の他人の聲がする、オ、さうだ羽織を借りて忘れて居た

金次郎戸を開ける

金次郎　羽織を置いて來る事を忘れて居たよ、大きに有難う

萬兵衛羽織を引たくり

萬兵衛　馬鹿につける藥はねへなア

金次郎　キ印につける藥もねへかね

萬兵衛怒つて立去る、金次郎見送る

金次郎　イス公羽織を脱いで身が輕くなつて好い氣持だ、明日からお前の分まで働いてやるぞ、サア寢よう

第二幕　小田原大久保加賀守御殿の場

御用部屋に諸士、三幣又左衛門、伊谷次郎右衛門、笠崎丹次郎、圓城寺貫次郎著座

伊谷　なんと各方、今日は彼宇津凡之助樣の御領分、櫻町陣屋支配の三村、物井横田東沼の荒廢を回復の爲、百姓金次郎を御召しになり、何か仰付けられるさうだ、高い聲では申されねど御上もチト御物好きが過ぎるやうだな

辻七郎右衛門　然樣だ、此小田原十一萬石の御家中に、人の無いやうで見つとも無いじやないか

三幣又左衛門　然し服部家の大借金を立派に整理した腕前を見れば、何とも言へぬ

笠崎丹次郎　服部と櫻町は違ふよ、服部は多寡が千二百石の家、傲りさへせねば借金は返せる、櫻町は四千石の陣屋、四千俵の倉入が九百三十三俵に減つた上に百姓は名代の惡づれ者、兎ても二宮の手に負へる事では無い

圓城寺貫次郎　幾度役人が代つても仕方の無い難村じやないか

三幣　それだから金次郎にやらせるが好い、藝は道によつて賢しと云ふから、百姓の事は百姓が一番委しい、何か好い智慧を出すかも萬れぬ

家老服部十郎兵衛入り來る、其後から豊田正作續いて登場

豊田正作　今承れば本日は、彼の大山師の金次郎に、内々御上が御逢になつて、櫻町の見込を御尋ねになり、樣子によつては勘略を御任せなさらうと云ふ事だが、聰明英智の御上なればよも彼が口車には御乘り遊ばすまい

服部十郎兵衛　豊用氏チト御詞が過ぎるやうだ、金次郎を大山師とは、御上に對して憚らねばなりますまい

豊田　是は御家老の仰ですが、拙者元來御追從が大嫌ひ、御前であつても申上るだけの事は申上る、金次郎は正しく大山師に相違ない

服部　貴君はまだ彼が非凡の大才を御存知ない、且又金次郎は武士及ばぬ立派な魂、拙者方に五年間奉公致しくれしに因り十分に承知致して居る

豐田　成程御家老ほど彼と親しくせられる人は御座るまい、然し燈臺本暗しとやらで、彼が貴家の整理を終り、貴家を立去る時禮に貰ふた百兩を、下女下男に分配し、一文半錢身につけぬは大山師の大山師たるところと、御氣付はなされぬか

服部　然樣な事では金次郎の心持は、中々貴殿に御分りない

豐田　それが人に溺れたと申す物で、水に溺れたより始末が惡い

家老大久保頼母入來る

大久保頼母　服部氏比處に御座つたか、お上の仰には今日金次郎まかり出なば、御庭へ廻せとの事で御座る

服部　承知致しました

大久保頼母奥へ入る

豐田　前代未聞の珍事、御上には此山師に餘程御迷ひ遊ばされたらしい、御救ひ申す道はないか

取次の若士次の間から

取次　申上ます、金次郎參上仕つて御座ります

服部　御庭口へ廻るやう御傳へ下され

同返し　大久保加賀守奥庭の場

大久保加賀守忠眞、家老大久保頼母と共に櫻花を眺めて居る

加賀守　コレ〳〵小姓共、用事があれば呼ぶほどに、暫く遠慮致せ

小姓　ハアッ

小姓共引込む、服部十郎兵衛二宮金次郎を伴ひ入來る

服部　御仰により、金次郎召連れまして御座ります

二宮金次郎遙か下つて平伏する

加賀守　苦しうない近う來い、ウーム汝が金次郎であつたか、會ふは初てゞあるが、名前は好く存じて居る、服部を以て三年前より櫻町興復の事を頼みしに、中々引受くれず、大に困却致し

たが、此度は好うこそ實地見分に赴きくれた

金次郎　バ、恐れ乍ら殿樣御機嫌麗しく入らせられ、恐悦の至に存じ奉ります、私めは金次郎、御領分の土民に御座ります

加賀守　金次郎、其方ほどの者が此小田原領内に生れしは、加賀守自慢であるぞ

金次郎　有難う存じまする

加賀守　金次郎、大名と云ふは窮窟なもので、傍に人が居れば、身分が違ふの何のと申して其方と親しく話が出來ぬ、唯今此處には賴母と十郎兵衛ばかり、遠慮は無い、もそつと近う寄つて見込を話してくれい

金次郎　然樣なれば御免を蒙ります

二宮席を進める

加賀守　櫻町の樣子はどうじや

金次郎　上國は溫泉の如く、下國は風呂の如くで御座ります、上國の富は費せども盡きず、下國の貧は溫めても〳〵冷ねます、百姓は土地を以て活計の根據と致しますが、彼三鄕の土地は、土性惡く黑くして灰の如く浮き立ち、諸作物を見まするに、穀細く丈短かく、穗先揃はず、到底上國と爲す見込は御座りませぬ、剩へ土民は遊惰放逸荒れに荒れたる村々で御座ります、例令風を移し俗を換へ、首尾よく興復仕りましても、二千石を以て分度と致し、それ以上は取れませぬ、斯樣な難村を千辛萬苦して元へ戻さうより、いつそ此地をお棄てなされ、宇津家には換地を賜る方が上策と存じます

加賀守　フーム然樣であるか、然し二千石でも取れる處を打棄置くは日本の損、あと二千石の不足の分は小田原領で補うても好い、一つやつて見てくれぬか

金次郎　畏りました、餘儀なきお賴み、私も一家の興復を思ひ切り、萬家を起す覺悟を以て御受仕りましよう

加賀守　快き承諾、余も滿足に思ふ、偖元手は何程入用か

金次郎　其元手が荒地興復の大毒、私は一文も持つて參らず、荒地は荒地の力で自づと興復致さ

せます

加賀守　何と申す

金次郎　恐れ乍ら天照太神此土に降臨し給ひし時は、日本國中皆荒地であつたかと心得ます、それを追々に開發し、今日の如き御國となせしは、荒地の力では御座りませぬか、五つの茄子を作つて四つ食ひ、一つを以て種子に致し、次第に功を積ますれば、何萬町歩でも開けまする

加賀守　金次郎の高論加賀守感服致す、然らば櫻町の興復は凡そ何年掛らうな

金次郎　然樣に御座ります、先づ早ければ十年、晩ければ十五年と見込まする

加賀守　好し、然らば十年を期し、汝に一切を委するほどに、汝天照太神の御足跡を履み、櫻町陣屋の荒地を開いて、日本國中の手本とせよ

金次郎　畏りました

加賀守　追て代官共より表立つて申付ける、今日は大義であつた

金次郎　有難う御座ります

二宮金次郎退く

加賀守　頼母、十郎兵衛

兩人　ハッ

加賀守　泰平の世は有難いものじやな

兩人　何と仰せられます

加賀守　戰亂の世であつて見よ、此加賀守も其方達も、あの百姓の金次郎に、頭の上がる事では無いぞ

兩人　御意の如く實に恐しい男で御座ります

加賀守　然し大才あれども之を用ゐることが出來ぬとは、泰平の代は矢つ張嫌なものぢやのう

兩人　御意に御座ります

第三幕　物井村百姓岸右衛門宅の場

岸右衛門、田吾作、李兵衛、縁側に腰かけて話をして居る

岸右衛門　今日は小田原から二宮金次郎と云ふ人が此櫻町の陣屋に來るさうだが、聞けば元は水呑百姓、御家老大久保樣の身代を直したとやらで、小田原の殿樣が減法惚れ込み、此三村の世話を燒かす爲、御徒士格に御取立五石二人扶持の俄武士にしたのださうなが、此櫻町へ來てごれほどの事が出來るものか、然しこんな成上りは御機嫌を取つて置くのが上策だ、丁度此道を通るから、先づ一杯獻上してごんな奴か見てやらう

田吾作　小田原のお武士衆が何ぼ代つてやつて來ても、其日暮らしのこちとらを金持にする工風は無い、コイツも又泣顏をして逃出すだらう

李兵衛　しかし二宮といふから、いくらか御利益があるかも知んねへぞ

岸右衛門　二宮でも一の宮でも、此村にやア納まらねへ、何の小田原の道路神（ごろくじん）に物井村の事が分つて堪るものか

闇の丑藏背後から現はれる

丑藏　ヤイ〳〵わい等何を言つてる、二宮大明神といふ神樣は、おれのやうな怠け者が大好き、丑よ博奕をやらう、金儲けの近道はこれに限ると仰しやるに違へねへ、若し博奕が嫌へ、酒が嫌へ、女が嫌へとぬかしたら、憚り乍らおれ樣が此村にやア住まして置かねへ

田吾作　いくら二宮さまでも丑公ばかりは持餘すだらうよ、三道樂揃つた上に啖呵がよく切れるからなア

丑藏　ベラ棒め、手前達のやうな木偶（でく）の坊とは違ふんだ、總身に血の通つてる己樣だ、小田原あたりの土百姓をいぢる積で掛つて來やがつたら、ヘン目に物見せてやらあ

李兵衛　賴むよ丑さん若し二宮さまが又無理な事を仰しやつたら

丑藏　何をぬかしアがる、賴まれりやア越後から米春だが、越後つ坊でも只じやア米は春かねへおれが見ん事二宮を征伐したら、お前んとこのお花坊をおれによこすだらうな

李兵衛　そりや無理だ、ありァ漸く肩揚が取れたばかりのねんねへだ、それに來年から岸右衛門さんとけへ、手傳にやる約束だから

丑藏　何だと岸右衛門所へ、へッ手傳たァ好く出來た、岸右衛門の手傳は子を孕む事だ

岸右衛門　オイ丑さん、何を言ふのだ人聞が悪い

丑藏　子を孕むから子を孕むと言ふのだ、嘘だとぬかすか

丑藏氣色ばむ

岸右衛門　イヤ嘘とは言はねへが人聞が悪いと言ふのだ

丑藏　人聞の悪い事をなんでするのだ

丑藏又岸右衛門に迫る

岸右衛門　まま待つてくれ、アレアレ向ふから二宮樣の御出だ

三人立並んで待つ、二宮金次郎脇差を一本指し、女房お波、一子彌太郎同伴、供の者に荷物を擔はせ、物井村の名主小矢野半右衛門案内して出て來る

半右衛門　オ、岸右衛門さん今二宮樣を御案内して陣屋へ行く所だ（二宮に向ひ）二宮樣物井村の口利き岸右衛門の宅で御座います、一寸御休息なされましては如何

岸右衛門　是は〳〵二宮樣お早い御著で御座ります、むさ苦しい所で御座いますが、ごうぞ暫く御休み下さいまし、陣屋は直ぐ其所で御座います、コレお鐵早く來て御挨拶をしないか、二宮樣の御著だ

女房奥より驅出る

お鐵　へ、、、、是は旦那樣奥樣坊樣お早いお著き、ごうぞ御上り下さいまし

二宮　イヤ是で結構

二宮緣側に腰かける、皆それ〴〵かけて休息する

二宮　岸右衛門と云ふはお前だね

岸右衛門　へ、、、然樣で御座います、ごうぞお見知り置かれましてへ、、、、ごうも此物井村も、毎年の不作で困窮致します、此度は貴君樣が小田原殿樣の御聲がかりで村の御世話を下さ

るさうで、有難い事でございます、エ、どうしても百姓で無くては百姓の事は分りません

二宮　ハ、アさうかね

岸右衛門　其邊の御話る少々申上げたう御座ります、如何で御座りましよう、寛つくりと御休み下されましては、一寸一口さし上る用意も致して居ります

お鐵　へ、、、今朝程貴君、此邊に珍らしい好い魚が御座いました、二宮様へ差上たいと申して取つて置きました、半右衛門さん貴君からもどうぞ御勸め下さいまし

二宮　折角だが二宮は今赴任の途中、酒を飲んでは居られぬ

岸右衛門　まあさう仰しやらずに

二宮吃となり大聲に

二宮　二宮金次郎は追從輕薄が大嫌ひ、酒も肴も入らぬわい

二宮腰を擧げる

岸右衛門　惡く御取り下さつては迷惑致します、それでは御著きの御祝として、御陣屋へ持て上

ります、どうぞ御受下さいまし

二宮腰を据ゑ

二宮　コレ岸右衛門、此二宮を見損なつたな、物井村のみならず櫻町三郷の土地人民、隅から隅まで承知せずに、今度の大役を引受けたと思ふか、お前の事もチヤンと分つて居る、博奕は打たぬが、朝つ原から酒を飲み、三味線を引いて遊ぶじやないか、小田原役人の知らぬを好い事にし、愚なる村民を欺して田畑を卷上げ、非義非道を振舞ふこと二宮金次郎は百も承知だ

丑藏　イヤ恐れ入つた二宮様、凡そ世の中に此岸右衛門位惡い人間は御座いません、どうか十分に油を搾つて下せい

二宮　お前は黑闇の丑藏と云ふ人だね

丑藏　黑闇だか明るみだか知らねへが、今日が日まで塵一本人の物を取つた事のねへ正直者だ、其代り酒と女と博奕は親の代から大好物、何とかして其道樂を十分やりてへと思つてるが、年中ピイ〳〵風車だから仕樣がねへ、二宮様の子分になつて金の出來る工風はありやすめへか

二宮　そつちの二人は田吾作と杢兵衛と云ふ人だね

田吾作　アレ恐いぞ、おれの名前まで知つてるぜ、エ、御初に御目にかゝります、私は田吾作こ

　申しやして岸右衛門に田地を取られたもの

杢兵衛　私は杢兵衛に相違御座りません、私は今娘を取られる所で御座ります

岸右衛門　これ〳〵何を言ふのだ

二宮　それも知つて居る、何かと名をつけては人の娘を召し使ひ傷物にして返すと云ふ事だ

お鐵　そればかりは本當で御座います、私は口惜しくつて〳〵

岸右衛門　馬鹿、默つてろ

丑藏　ヤイ様ァ見やがれ岸右衛門、お花坊はおれによこせ

杢兵衛　それはいけない

　二宮形を改め

二宮　皆好く聞けよ、今度小田原様の思召で此二宮に三郷の興復を仰付られたからには、先第一に人間の根性から叩き直して懸るつもりだ、農業に精出せば褒美をやる、怠け者は此土地に居られぬ樣にするぞ、二宮の眼は鏡と同樣胡麻化しは決して承知せぬからさう思へ、田吾作、杢兵衛はごつにでもなる、岸右衛門や丑藏は此村の惡蟲、行ひを改めねば此方に考へがある明日と云はず今日から、二人の仕事を邪魔してはならぬぞ、イヤ思はぬ事で手間取つた、半右衛門早く行かう

半右衛門　それでは御案内致します

　四人行過る、皆々見送る

丑藏　コイツは是迄の二本棒と大違ひだぞ

田吾作　恐ろしい目付だよ

杢兵衛　おつかねゝ聲だ、おらあ雷が落ちたかと思つた

岸右衛門　なあに譯はねゝ、今に見ろ骨拔鮪にしてらあ

同返し　丑藏宅の場

大工二三人砂官二人忙しく丑藏の家を建てゝ居る

書役甲　ごうも先生は驚いた御方だ、朝早くから夜晩くまで、村中を巡回され、仕法の出來榮を見て御歩行きになる、ヒョイと思ひ出すと、夜が夜中でも一人で抜けて出られるなぞは、とても人間業じやないよ

書役乙　全くだ、見給へ此物井村の變つた事を「家ありや薄の中の夕煙」と遊歴の俳諧師が詠んだ景色は何處へやら、段々に稗畑が開けて行く、家も立つ、人々も集まる、それに此物井村の奴等はごうしたものか、チツとも先生を有難がらない

書役甲　さうでも無い、岸右衛門見たやうな奴は例外さ

書役乙　丑藏ごうだ

書役甲　コイツも亦仕方の無い人間、それを先生は何か見處があると見ゐて、眞人間にしやうとなさるが、ごうも底の知れぬお慈悲だなア

二宮先生向ふから來る

二宮　ヤア大部出來たな、皆好く働く、御苦勞々々そら褒美だ

風呂敷包から餅を出して一同に分つ

大工甲　二宮の旦那、有難う、ごうも旦那に使はれちやア怠けられませんよ

大工砂官等一同　本當だよ、何だか氣が浮き〳〵して我知らず仕事が捗取ります

皆々茶を入れて飲む

書役甲　時に丑藏は何處へ行たのだらう

書役乙　のん氣な奴じやないか先生に家を建てゝ貰つて姿も見せない、ヤア來た

丑藏　オヤ是あなんだ

二宮　約束のお前の家だ、氣に入つたか

丑藏暫く考へて居る、聽て二宮先生の前に平伏して泣く

丑藏　旦那ッ、ァ、二宮様、分りました、貴君はまァ何と云ふ親切な御方でしよう、ァ、私は仕様の無い悪者で御座りましたが、今日と云ふ今日思ひ當りました、屹度改心致します、どうか御勘辨を

二宮　丑藏おれの心持が分つたか

丑藏　分ら無きァ畜生だ、お前さんの家來がおれの腐つた便所に這入り、袖に柱が引掛つて倒れたのに何の斯のと文句をつけ、元の通り建てゝ戻せと言ひましだ、そしたら貴君が便所が其位朽ちて居れば、母屋も定めし危險だらう、それも序に建て直してやらうと仰しやつた、まさか建てゝくれやうとは思へぬから、口から出任せの惡態をついて、建てられるものかおれの家は三間に八間の大伽藍だと言つたら、貴君が丑藏、人間は人間らしい家に住まねば人間らしい心が出ない、お前の心はお前の家の通りだ、家を建直してやるから心を建直せと仰しやつた、何の小癪なと思つて、隣村まで遊びに行つて居たら、留守の間に此家が出來た、ァー恐れ入りました、丑藏の歪んだ心もお蔭でスッカリ今建直りました、建直つて見りや本の家で澤山だが這入らぬわけにやァ行くめへな

二宮　それほどに思ふか

丑藏　思はなくて何樣しましよう、貴君の御心持ァ生佛だ、丑藏一人を助けるのじや無へ、大勢を助ける爲に丑藏を助けるのだ、憚り乍らそれ位の事ァおれにも分る

二宮　感心だ、丑藏、見上げたもんだ、其魂なら後戻りする氣遣ひはない、然し丑正業に就くには素手じや行くまい、おれが金を五兩借す、それでお前の思ふ事をしろ

丑藏　旦那どうしてそれは借りねへ、其代りおれを旦那の人足に雇つて下せい、是から一生懸命に働いて見せます

二宮　宜しい、ではお前毎日おれの後から默つてついて來なさい、使ひ道がある

豐田正作泥醉の態で現はれる

豐田　イヨウ先生、又講釋か、拙者は朝から貴公の留守宅を尋ね例によつて御内儀に御馳走になり、好い心持ちでブラ〳〵やつて來た、オや其方は丑藏だな

丑藏　丑藏で御座いますが、先刻までの万藏とは違ひます、姿は元の通でも魂は入替つて居りま
す

豐田　ハ、、、面白い事で申すな、魂が何樣入替つた、まさか狐狸の魂と入替りもすまい

万藏　豐田の旦那、私は今まで惡玉につかれて居りましたが、二宮樣の御蔭で善玉と入り替りま
した

豐田　ウハ、、、ヤイ丑藏、二宮に家を建て、貰つて、魂を入替たといふのか、二宮の妖術にか
、ると一寸さう云ふ氣になるものだが、永持はしないぞ

丑藏　成程私の事ですから、旦那がさう思ひなさるも無理はねへ、まあ長い目で見ておくんなさ
い

豐田　二宮氏小術はお止しなさい、貴殿は中々ゑらいが、失禮乍ら聖人の正道を御存知なく、兎
角私智にまかせて權道を用ゐられる、假令ば此豐田正作仕法の邪魔をして五月蠅いから、お内
儀に言付けて、好物の酒を以て盛り潰される、術策と知りつゝ拙者は飲む、スルト本當に酩酊

して貴殿仕法の邪魔をする事が出來ぬ、オノレ大山師め、刀に掛けても汝のする事を打壞して
見せると言つたが、今では其大山師の廣言通り、不思議や櫻町が段々好くなる、豐田正作、百
姓共に會はす顏が無いハ、、、

二宮　櫻町が段々好くなるのは、殿樣の御滿足では御座りませんか

豐田　然樣、それに違ひない、然し殿樣は殿樣、家來は家來、殿樣の思召と藩士の考へは違ふぞ
其所で、某も實は貴殿には大反對、だが二宮貴公のお内儀はゑらいぜ、年も貴公とは親子ほど
違ふが好い女だ、拙者度々參つて酒を飲むが、誠に親切で氣が利いてる、つい〳〵此通りへベ
レケにまかり成る

百姓兩人出來り豐田を見て

太郎作　オ、豐田樣は此處に御座つた

次郎兵衛　一寸申上ます、二宮樣の御指圖で御座いますが私共はアノ新道を拵へる爲、大きな難
儀を仕ります

太郎作　竹鍛を取拂はれましては風當りが強くなりまして困ります、ごうか御差留を願ひます

豐田　好し〳〵承知致した、二宮のする事は皆氣に食はぬ、直に差留めるであらう

兩人　へイ〳〵有難う御座ります

豐田　然し汝等、百姓の分際で、風當りが強くて困るなごと申すは、柔弱千萬でないか

兩人　イエ決して然樣では御座いません、全く以て風當りが強くて住居が出來ません

豐田　是れ兩人、拙者を何と心得て居るか

兩人　小田原樣の御目付と存じます

豐田　其目付が汝等の家の風當りまで心配して堪るか、馬鹿者め、もそつと大きな事を持つて來い、二宮の仕事なら何ぼでも妨害して遣はす、ノウ二宮氏ハ、、、

二宮　妨害が強いほど丈夫な仕事が出來るものだ、精出して妨害なされ

豐田　それごうじや、風當りは強いほど好いとなぜ言はぬ

兩人　ごうやら風が變つて來た

豐田　風が變れば當らぬでは無いか、馬鹿者め、歸れ〳〵グズ〳〵致すと打斬るぞ

兩人　恐い〳〵逃げろ〳〵

兩人逃げて這入る

豐田　アハ、、、アノ此處な蠅蟲めらが

第四幕　櫻町陣屋風呂場の場

書役甲　先生御風呂の加減が丁度宜しう御座ります

二宮　有難う、イヤ時にお前達に此間私が風呂の中で面白い事を見附出した事を話さうか

書役乙　それは何樣云ふ事で

二宮　イヤ外でも無い、わしが兼て人間は奪つて取るな讓つて取れと言つて居るが、風呂の湯で試すとよく分る

書役甲　へエー

二宮　風呂の湯を此方へ取らうと思つて手前の方へ引いて御覽、大半向ふへ逃げて行く、又向ふに推せば却つて多く此方へ流れて來る、それと同じ道理で、此世の中は取らうと思うて財(たから)を手前へ引けば逃げ、押し讓れば此方へ來るものだよ

書役乙　（手眞似して）成程此方へ引けば向ふへ逃げる向ふへ推せば此方へ來る、成程妙だ

書役甲　先生風呂の中でもそんな事を考へて御出になる、敵はぬ筈だ

二宮　然し推し讓るばかりが人間の能ぢやない、時あつて大に引いて取らねばならぬ、其處で人間の手は、推す事も出來れば引く事も出來るやうに拵へてある、鳥獸の手は人間と違ひ、搔き取る働きは出來るが、推し讓ることが出來ぬ、だから人間中で取る事ばかり知つて讓ることを知らぬ者を、アレは禽獸に近い奴だと云ふではないか

書役甲　アハ、、、、是は好い事を敎はつた成程（手眞似して）人間は斯うか、禽獸は斯うか、ハ、ハ、

書役乙　ぞうも先生さう仰しやると、此邊に禽獸に似たものがありますね

二宮　人の事よりは自分の事、銘々畜生道に墜ちぬ工風が肝腎、サア一風呂這入らうか

二宮風呂場に入る、曲者外に窺ふ、豐田正作又其曲者の後に窺ふ

二宮　オウ是は好い湯だ

聲を聞いて曲者竹槍を突込む、豐田隙さず曲者を捕へる

二宮　危ない〳〵、太閤記十段目だぞ

書役兩人　先生何事ですか

二宮　イヤ光秀はモウ捕まへられた

豐田正作覆面の曲者を引ずり乍ら現はれる

豐田　御明察の通り、曲物は拙者が押へた

書役甲　ヤア是は豐田樣

書役乙　ぞうして此處へ

豐田　實は拙者は何時でも見ゐ隱れに二宮氏を守護して居る

書役甲　アノ貴君が

書役乙　是は又意外

豐田　今こそ懺悔致す、聞てくれ、初拙者は二宮氏を疑ひ、誹謗反對したが、我君の深き思召と見ゐて二宮氏の什法を監督の役を仰付かり、當地へ參つて其人の行ひを見れば、驚き入つたる事ばかり、敬服して心は改めたが、わざと反對を裝うて、邪魔なす奴等を又邪魔し、竊に二宮氏を助けて居たのだ

二宮　辱ない豐田樣の御厚意疾くよりそれと察したれど、今まで默つて居ました

書役兩人　へ、ー

豐田　然し此曲者、何奴であるか、一應面體を改めてくれう

二宮　お止しなさい〳〵、おのれの身の危ふきを忘れ、人に槍著ける愚者の面體、見ぬ方が好い然し曲者に申し聞かすが、二宮は此櫻町の興復に一身を投出して居るから、竹槍鐵砲素より覺悟だ、然し人を殺せば、おのれも命は有るまい、それほど金次郎が憎いなら、思ふ通にしてやりたいが、今五六年は死ぬわけには行かぬ、待つてくれ

豐田　二宮氏それは餘りに寛大過ぎる、既に禍心の現るゝ上は

二宮　イヤさうでない、若し私の爲す事が人の道に背いて居れば、例令此曲者の槍先は逃れても他の曲者に刺されましよう、放して御やりなされ

豐田　許し難い奴なれど、二宮氏の寛仁大度により、此場は見逃して遣はす、再び斯樣な事を致せば首がないぞ

曲者坐つたまゝ泣く

豐田　早く此場を立去れと申すに

曲者動かず

書役甲　何故行かぬ

書役乙　先生が許すと仰しやるのに

曲者覆面を取る

書役兩人　オ、わりや岸右衛門だな

岸右衛門　（泣き乍ら）二宮樣、アア愚な事を致しました、人非人の岸右衛門御許し下さるばかりか顏も見ずに、逃すと仰しやるのは、私に耻を搔かせまいとの御心、有難う御座いますが、それでは御上に對して相濟みません、豐田樣どうぞ御法通り御仕置を願ひます

と言ひて後に手を廻す

二宮　御法を正して貰ふ位なら、此苦勞はせぬ、岸右衛門大抵世話を燒かせた上に、又世話を燒かすつもりか

豐田　反對の罪は我等にも有る、岸右衛門顧みれば汝も我も耻かしい事ばかりだな

岸右衛門　穴でもあればと存じます、豐田樣さへ歸伏された御方私風情に齒が立ましようや

女房お鐵驅込む

お鐵　御免下さいまし、夫岸右衛門重々の不心得は皆私が至らぬからで御座います、どうぞ私を罪にして夫を御許し下さいませ

二宮　罪人が出來るのが嫌さに、いろ〳〵心配して居るのだ、分らぬか

豐田　サア〳〵女房岸右衛門を連れて歸れ、チト取逆上て前後を忘じて居る岸右衛門は病人だから氣をつけて介抱せよ

岸右衛門　有難う御座います、二宮樣の御思召、身にしみてよく分りました、これ女房御禮を申せ

お鐵　有難う御座います

豐田　サア早く行け

岸右衛門　畏まりました、二宮樣生れ替つた岸右衛門を御覽下さいまし

二宮　善惡は心の置所によつて生ずるもの、岸右衛門隨分役に立つてくれ、それが報德だ

岸右衛門　然樣なら皆樣

岸右衛門お鐵をつれて引込む二宮僕可內登場

可內　御新造樣の御申付けで日那樣へ申上ます、横田東沼の村民共日那樣御仕法迷惑のよしを小、

田原表へ申立、小田原から伊谷樣、磯崎樣、園城寺樣當御陣屋へ御出張、程なく御著になりまする

豐田　何だと村民の訴へにより同役ごもが此地に參るとな

可内　然樣に御座ります

豐田　好し――此方參つて彼等に對手致す、二宮氏御心配あるな

二宮　一難去つて又一難、此度三氏の御出張となれば、豐田樣折角の御厚意であれど、一通りの申分けでは御疑念は晴れますまい、是は餘程重大な事柄で御座ります

書役兩人　我々共は陣屋へ歸り、御三方樣を御待ち申上ましよう

二宮　さうして下され

豐田　貴君が是程の御骨折を少しも感謝致さぬとは、情ない村民共、アー愚民で御座るなア

二宮　其愚民は櫻町のみか日本國中に充滿致して居りますが、表面治まつて亂れざるは刀の威力で本當に心服して居ると思へば大間違ひ、何か思懸けぬ天災でもあれば、忽ち蜂の巣をつついたやうになるものと御承知ありたい、二宮の仕法に反對などは小事、日本國中の大亂が起らぬとは限りませぬぞ

豐田　フーム貴君は其所まで考へて御座るか、ア、違つたものだなア

同返し　櫻町陣屋の場

百姓大勢、書役の若者兩人と二宮尊德の行方不明を氣遣ひいろ〳〵噂して居る

百姓甲　それで御新造樣はどうしても御存知ないらしいかね

書役甲　あれほどの大先生だもの、御新造樣にだつて仰しやるものか

百姓乙　どうしても此方とらうとは違ふね

書役乙　それで御新造樣は旦那の御行方が分るまで、横にならぬと仰しやつて、立行といふ事をなさる、ゑらいものだ、ろくに睡りもなさらぬやうだ

百姓丙　旦那樣も唯の人じやねへが、御新造も恐ろしい方だね

お波　皆さん旦那様の御行方が分らぬので、心配して下さるのは有難いが、肝賢の仕事を棄て、お捜し下さつては困ります、ァ、云ふ氣性の旦那様だからきつと其内歸られます、其時叱られぬやうにして下されませ

百姓甲乙丙　それは御道理だが、ごうも仕事が手に附かねへので、斯うやつて居りやす、東沼横田の者があんな事を申しましたから、旦那様が御立腹なさるも無理はねへ

お波　イエ其事はもう濟ました、小田原からの御出張の御三方も、又宇津家の横山様も主人に落度の無い事は好く御承知で御座います、決して立復するなぞ申す事は御座いません、必ず何か深い考へがあつて、身を躱した事と存じます

岸右衛門丑藏打連れて走せ來る

岸右衛門　分つた〳〵、御行衛が分つた

皆々喜び立上る

お波　何處へ參つて居りました

丑藏　成田の不動に三七日の御籠り、斷食までなすつて入らつしやつた

お波　それでやつと安心致しました

百姓甲　有難い、旦那でも斯うなれば神佛を頼むより外に仕方がねへと思はしやつたんだね

百姓乙　不助様の御力で、東沼横田の分らず屋の目が醒めますやうに祈らしやつたに違ひへねへ

百姓乙　ごうして旦那の居所が知れたね

岸右衛門　江戸へ出てやつと其事が知れた、それは何でも旦那様が御籠遊ばす前に、おれは大久保加賀守様の家來だ、心願あつてお籠をする、決して怪しい者じや然いと云うて、澤山のお金を宿屋の主人に御預けなされたさうだ。宿屋では驚いて大久保様へ伺つたら大久保様からそれは此方の家來に相違無い、丁寧に扱ふやうにとの御沙汰、何しろ御老中様の御聲掛り、宿屋は畏まつて大事にして居たといふ事だ

丑藏　それで其事がやつと分つたのは四月の五日か六日、八日は滿願の日といふので直ぐ御迎へに行くことになり、御家中から小路只助様御出張、幸ひに江戸に居た物井の半右衛門が行く、

東沼の菱右衛門、横田の槍藏まで、涙を流して前非後悔、謝り入つてついて行つた、おれと岸右衛門とは、何でも早く御新造樣や村の衆に知らせねばならぬと、一足先に飛んで歸つた

岸右衛門　それで御新造樣、大抵明日か明後日駕籠に乘つて御歸りだらうが、斷食のあとだから成るだけ柔かいものを召上るやうに、御用意なされまし

丑藏　さうだ〳〵、斷食のあとで、急に固へ飯なんか食へねへ、何でも柔かい物に限る

お波　それは好く承知して居ります

岸右衛門　オヤ何だか大勢の聲がする

丑藏　コリやぢうだ旦那の御歸りらしい

小路只助名主半右衛門等と二宮尊德の前後の取卷き歸り來る

小路　二宮氏貴殿の身體は鐵か石か、三七日の斷食後、稀には山登りしたと云ふ人も御座るが、貴殿の如く我等の脚も及ばぬやうに歩行く人は、恐らく前代未聞と申して好からう

二宮　百姓業を眞劍にやると隨分身體が鍛へるものと見ねますな

小路　見ねますなぢと平氣で仰しやるが、此眞似の出來るものは、櫻町に有るまい

二宮　それが卽ち怠惰百姓の證據です

小路　ぢうだ半右衛門、菱右衛門、槍藏驚いたな

三人　全く以て恐れ入ました

一行陣屋に著き門を入る

小路　オ、最早此處は陣屋だ、御新造々々々、二宮氏を無事に連れ戻りました

お波　有難う御座ります

岸右衛門等一同　旦那樣御無事御歸宅御目出度御座ります

二宮尊德靜かに緣側に腰かける、小路只助も腰かける外皆々休息する

二宮　皆定めて心配したゞらうが、少し考へる事が有あつて、成田へ參つた

一同　有難う御座います

二宮　イヤ有難い事は無い、迷惑だらう、二宮は如何なる妨害が有ても、此櫻町は金輪際動かぬ

つもりだ

一同　是迄の悪い事はどうぞ御勘辨下さいまし、今後は決して、仰に背きませぬ

二宮　そう言うてくれゝば二宮も働き甲斐がある、三郷の取起しは慥かに成就する、安心せよ

一同　有難う御座います

小路　二宮氏に御尋ね致すが、貴公の宗旨は何だね

二宮　私は教法家よりも醫者の方で、報德丸を用ゐて人の病を直します

小路　報德丸とは

二宮　神道一七儒佛半七づつをよく調合したもので、三昧一丸と名付けます

小路　一寸分り兼ねるが

二宮　神道は我國開拓の正道、之に儒佛半七づつを加へると報德丸が出來ます、儒道は譬へば料理の獣立書の如きもの、立派に書いて有ても腹の足しになり兼ます、佛道は料理屋の書出しのやうなもの、食ふた覺ゐは有るが、今食ふ事は出來ぬ、是も腹の減た者には役立ちません、報

德の道は難しい理窟をいはず、茄子大根を太らせる道で、直に空腹を充します、それが卽ち天照太神國家經營の本道で御座ります

小路　成程面白い、然し其神道家が不動明王に祈願したのは可笑しいね

二宮　其所が卽ち佛道半七です、元來不動明王といふのは、形無き道理を形に顯はして人に見せるもの、其半面は慈悲の相、半面は憤怒の相、背中に大火焔を背負つて齒を食しばり、一寸も其居所を動かぬのが不動明王の本體

小路　如何にも

二宮　私先年此櫻町の興復を大久保樣に御受合申上た時、不動明王の如く、假令妨害の火の手が背中に燒けついても、此處を動くまいと決心致しました、然るに櫻町へ參つた後、村民があまり仕法に反對致すので、御役御免を願ふた事が御座ります、是では中々不動明王にはなれぬと心付き、成田不動を眼の前に置いて、我一心の動不動を試しましたが、此度こそは事の成否に拘はらず、我生命の有らん限り、櫻町を動かずとの大勇猛心を固めました、つまり不動の色揚

が出來ましたわけで御座います

小路　それで好く分つた、貴殿は慥に不動明王、其決心が卽ち降魔の利劍と申すもの

岸右衛門　慈悲の相、憤怒の相も十分に現はれて居ります

丑藏　サア不動樣の御前立の金伽羅童子はおれだ、邪魔する奴は片つ端から退治てくれる

二宮　コレさう威張つても腹が空いては駄目だ、お波そろ御〳〵粥の用意をしてくれ

お波　ハイ拵へて居ります

第五幕　天性寺圓應教訓の場

櫻町陣屋門前に、重州烏山の天性寺圓應和尙坐り込んで動かぬを、門人出でて歸さんとする

門人　和尙さんなんぼ貴僧が剛情を張つても、先生は御會になりません、素直に御歸りなされ

圓應　人を救ふは僧の役目、烏山の民が飢餓に迫るのを救はう爲め先生から良法を授かりたい、拜謁が出來ねば此儘餓死しても厭ひませぬ

門人　餓死なされるのは貴僧の御勝手だが陣屋の門前で死なれては甚だ迷惑・寺へ歸つて餓死なさつたら好からう

圓應　イヤ此處で餓死致します

二宮先生大聲で門人を呼ぶ

二宮　强情な坊主だ、おれが逢つて言ふて聞かせやう、連れて來い

門人　ハイ〳〵、和尙先生が會はうと仰しやるから、此方へお這入り

圓應　有難う御座ります〳〵

圓應座に通り平伏する

二宮　これ坊主、何の爲に此處へ來て我仕事の邪魔をするか、剩へ門前に坐り込み、餓死しても動かぬと云ふは何事だ

圓應　愚僧は野州烏山大久保樣の御領内に居りまする天性寺圓應と申す者で御座ります。烏山の民窮乏して死に瀕する者多く、見るに見兼て色々業を授けて居りますが私一人の力では兎ても

多勢を助ける事が出來ません、先生何卒救貧の良策を御授け下されませ、御願で御座ります

二宮　お前の所には國君があるだらう、民を治め、民を救ふは烏山侯の爲さるべき事ではないかお前は佛門の徒だ、荒蕪を開き、民食を作る事は佛の道では有るまい

圓應　御說の通りで御座りますが、衆生濟度は佛者の本願、烏山領內無數の難澁人、到底見ては居られませぬ

二宮　まだ分らぬか坊主、人各々職分がある國君は國君の職を行ひ、臣下は臣下の職を行ひ、僧は僧の職を行ふて國が治まる、若し臣下にして國君の事を行ふものあらば僭上暴賊と云ふて好い、況や僧にして國君の道を行ひ、人民を救はんなどと申すは、職分を知らざる差出者であるぞ、烏山の君臣、其人民の困窮を憂へず、其飢餓を坐視せんとするは言語道斷、汝眞の佛者ならば、天地に祈り、佛菩薩に憫れみを乞ひ、米穀豐熟を求むべきに、已の分際をも知らず、佛道にも無き飢民窮助に志し、果は力足らずして此處に來り、我に其道を授けよと云ふは何事だ其志は殊勝なれども、其行ひは道に外れて居る、お前が誠に民を救はうと思ふなら、何故烏山の殿樣に民間の實情を訴へ、富國安民の政をさせぬ、道に外れた事は二宮は大嫌ひだ、お前が佛前で餓死したら佛も棄てゝは置くまいが、二宮の門前で餓死した所が、何の役にも立ちはせぬ、分つたか坊主

圓應　ア、目がさめた、是は實に聞きしに優る活佛活人、民に食を與ふは國君の役目、其職に非ざる圓應が、何ぼ奔走したとて埒は明かぬ、イヤ還ります〳〵還つて至當の道を取ります

二宮　さうだ、何のあてごも無く此處等をうろ著いて時を費すより、早く烏山に還つて其職分の人を動かすが好いぞ、然し身其職に在り乍ら窮民撫育の方も建てず、僧侶の敎へを待つなごは情ない人達だなア

圓應再拜して歸り行く

同　返　し　　烏山家老菅谷客間の場

菅谷　和尙御安心下され、先日の御話により、早速小笠原忠太夫と申す者を野州櫻町へ遣はし、

二宮金次郎先生に、拙者近々罷出拜顏致したき旨を申入れた、追つけ之へ戻るで御座らう

圓應　それは御家老駄目だ、然樣な事で容易く面會を致す二宮先生では無い、愚僧是まで數多の人に接したがまだ彼二宮先生ほどの英雄を見た事が御座らぬ

取次の者入來る

取次　唯今小笠原樣御歸りに御座りまする

菅谷　ちやうど好い、直ぐ是へと申せ

取次　畏まりました

取次下がる引違へて小笠原忠太夫

小笠原　唯今歸りました、オー是は天性寺の和尚も

菅谷　二宮先生は何と仰せられたな

小笠原　圓應和尚の前で御座るが、彼は全く狂人で御座ります

菅谷　どう致した

小笠原　御申付の如く櫻町陣屋へ參り、再三再四面會を乞ひましたところ、無禮にも多用なりとて面會致さず、其末にやつと逢ひましたが、行なり大聲に何の所由で我仕法の邪魔をするかと申しました

菅谷　それから

小笠原　此方は丁寧に近日弊藩の家老菅谷八郎左衛門、富國安民の良法御尋ねの爲御自身貴方へ御訪ねしたい、御多用の中なれども、何卒御面會を乞ふ旨を申しましたら、大變な見脈で、暴言を吐きました

菅谷　如何なる暴言を

小笠原　三年の儲無ければ國其國に非ずと唐人は言ふた、お前の國は一年の儲も有るまい諸侯の任は天朝から民を預り、飢餓の憂なきやう世話をするのだ、又御家老の任は君の意を受けて、其事を取計らふ筈では無いか、それに君も家老も其大切な職分を外にし、美衣美食安逸を貪り其日を過ごすのは大篦棒と云ふのだと、斯樣に申しました

圓應　二宮先生なら其位の事は申されましよう
小笠原　それが惟しからぬ、諸侯には自から諸侯の務がある、大夫にも大夫の務がある、彼二宮金次郎水呑百姓から成り上り、武士の片端には列すれど、武士の武士たる本分あるを知らず、百姓の世話ばかりを武士の仕事と心得て居る、孔子も食を足し兵を足し民は之を信ずると曰はれた、食を足すばかりが士の務めでは無いでは有りませんか
菅谷　好し〳〵、それから何と申した
小笠原　其大篦棒の君臣が此處らあたりまで人を派し、富國安民の法などを求めるのは、戸迷の沙汰だ、烏山の天地も此處の天地も一つだ、人に相談するよりも天地に相談して見るが好い、草を刈るに草に相談は入らぬ、鎌をよく磨げば、天下の草は皆刈取つたも同じだと云へ、忙しいから閑人に面會は御免を蒙ると劍もホロ、の挨拶、おのれ少しばかりの才智に慢じ出放題のたわ言、其頬桁をと思ひましたが、大事の御使を勤めねばならぬ身と胸を押へて、我慢致しました、アレは全く狂人です

圓應　小笠原殿、憚り乍ら御目が低い、二宮先生を狂人とは罰が當りましよう
小笠原　何罰が當る、ハ、、和尚貴僧も餘程どうかして御座るな
菅谷　イヤ是は拙者の誤り成程一通の事では拜顏も出來まい、幸當大久保家は小田原とは御親類何れ御直書でも頂戴して出向く事に致さう、小笠原氏大儀であつた
小笠原　然らば私は歸宅仕ります、然し思へば忌々しい狂人だなア

又返し　烏山城大手前

百姓一揆にて町人逃迷ふ

町人甲　一揆だ〳〵、打壞しだ
町人乙　今本町の米屋がやられた
町人女　斯う云ふ時には日頃憎まれて居る者は堪まらない、藥師町の吝右衛門さんのアノ大きな家がめちや〳〵だ

町人丙　ごうだアノ音は

町人女　恐ろしいなア、何處へ逃げたら好からう

町人丁　お城の中には這入れぬし困つたものだ、グズ〳〵して居ると竹槍で突かれる

小笠原忠太夫歩兵若干を率ゐ城中から出來る

小笠原　コレ〳〵町人唯今郡奉行大河原權右衛門殿、百姓へ御理解の爲、御出張になつたが、萬一承知致さず、お城の方へ向つて參れば、據無く大砲を以て打拂ふ手筈である、此處に居てはあぶない早く何れへか逃げろ

町人　逃げろと仰しやつても逃げる所は御座りません、どうか御城の中に入れて頂きたう御座ります

小笠原　それは御家老から御沙汰がなくては出來ぬ事だ、そう言ふ間にも寄せて來るかも分らぬ早く逃げるが好い

町人皆々　これはどうしたものか困つたなア

町人皆泣く、天性寺圓應跣足にて走り來る

圓應　とう〳〵斯う云ふ事になつて仕舞つた、小笠原樣二宮先生の仰しやつた事を思ひ出しましようを賴んだが、まだ參らぬ、困つたものだ

小笠原　一言も無い、然し其後小田原侯と當大久保家との御緣故を以て、二宮先生の方へ救助米

圓應　櫻町に於ては二宮先生茄子の味の時候外れなるを感じ、早く飢饉の用意をなされたので、何事も無いさうだ、先生の明智に今更感服しますなア

小笠原　感服しても始まらぬ、差當つての明策は無いものか

圓應　怒り立つた百姓は事理を辨じませぬ、今郡奉行が說得して御座るが、御家老の首を切れなどと申す勢ひだから、兎ても聞入ますまい、追つけ此處まで押寄せて來ませう

小笠原　來れば是非が無い、門を開いて大砲で打拂ふばかりだ

圓應　ナニ大砲で打拂ふ、大砲で打拂へば百姓は散じましようが烏山三萬石は、公儀から、よも

其儘には差置かれまい

小笠原　ム、

圓應　それ程の事が分らぬとは、御家中一統血迷うて御座る、藩士は一體誰の作つた米を召上るか、おのれに食を供するものを砲擊する法が御座りますか

小笠原　ム、

四方にワーッと歡聲が上がる

圓應　オ、あの夥しい鬨聲は

小笠原　いよ〳〵寄せて來たかな

岸右衛門丑藏澤山の米を積んだ駄馬を引き大急ぎでやつて來る、後から百姓町人大勢ワイ〳〵從いて來る

丑藏　退いた〳〵、櫻町の二宮樣から烏山への救助米を持つて來た、サア一揆を止めろ騒ぐな

岸右衛門　ヨウ和尙樣此處に御座つたか斯う云ふ事の起らぬ前にと、餘程道を急いだが、追付か

なかつた

圓應　拜みます〳〵、地獄で佛とは此事だ、二宮大菩薩二宮大明神

小笠原　拙者は當藩の馬廻り小笠原忠太夫と申す者二宮先生の御芳志辱ない、早速倉庫を開くで御張らう

丑藏　なんだ鼠見たいな武士だなア、倉へ入れりやア忠太夫が食つて仕舞ふ、オイ皆持つて行つてくれ、構ふこたはねへ、櫻町から烏山まで馬が續いてるんだ

群衆手に手に米俵を擔ぎ大喜びで歸る、圓應和尙手傳する

圓應　是で一揆も治まり百姓も助かつた、南無二宮大菩薩、南無二宮大明神

第六幕　大谷川水車の場

百姓三人立話

甲　今度二宮樣といふ偉い御方が來さしやつて此日光神領の御世話を爲さるといふが、有難い事

では無いか

乙　何でも其御方は、野州櫻町の荒果た土地を、元の姿に取返し日本一の身代直しと評判の御方じやお大名やお旗本方から引張凧であつたが、矢張こつちは公儀の御威光で、とう〳〵二宮樣を雇上げといふ事になつたのだ

丙　二宮樣は報德といふことを敎へて下さるさうなが、一體ぞういふ事であらう

甲　おれが聞いたのでは、何でも此世の中は日輪の御光が本、草木も人間も皆日輪の惠みで育つこれを忘れぬやうに働くのが報德じやといふ事だ

乙　さうじや〳〵、天道に逆らうては何事も榮ゑぬ、精出して田畑を作れば、あとは天道が御存知、米や麥の出來るのも、大體は天道さまの御力で、人間はほんの僅かの御助をするばかりだ

丙　然しおれが聞た所では二宮樣が仰せられるには、人間の力も馬鹿にするな、天道ばかりじや米麥は出來ぬ、人間あればこそ天道樣のお德も顯はるゝものだと敎へなさるさうだ

甲　さう言へば然樣だ、瓜の蔓には茄子はならぬ、南瓜の子は矢張り南瓜、然し瓜も南瓜も放て

置いては立派なものは出來ることでは無い、人間の力あればこそ立派なものになるのだ

乙　何でも二宮樣も元は只の百姓ださうなが、智慧が恐ろしくあるので、段々御出世なさつたさうな、つまり南瓜の親玉見たやうな人だ

丙　恐しいお方といつて、あれ位の人は滅多にない、此前小田原に饑饉の時、殿樣の言付けで國へ歸り、倉を明けて米を出せと仰しやつたところが、御家老達がぐず〳〵して居たら、此大切の場合に何を小田原評議だ、百姓を見殺しにすれば烏山のやうな騷ぎが起る、平生の儉約は何の爲だと、大聲を出して叱つたら、御家老達は眞青になつて、柔順しく倉を明けたそうだ、其時傍で見て居た人の話に、二宮樣の眼からピカ〳〵光りが出たさうだよ

甲　そんな恐ろしい二宮樣に、叱られぬやう仕事に精出さうでははいか

乙　さうだ〳〵二宮樣さへこつちの者と極れば安心だ、惡い役人を叱つて貰はう

丙　サア行かう

三人行過るアト二宮尊德門人富田高慶、齋藤高行、福住正兄等を從へて出て來る

二宮　各唯今の百姓達の噂話を聞かれたか

富田　野良聲で話すので切れ〳〵ながら承りました

二宮　田夫野人悔る可らず、我報德の道を略心得居るには感服致した、然し彼等は未だ天道と人道との區別を知らぬが、各方は御心得でるあるか

三人　ハイ

二宮　天道とは自然に行はるゝ法則のことで凡そ此宇宙間の物、動植人間に至るまで一として其法則にかゝらぬはない、其天道を都合の好いやうに修補して使ふものが人道で御座る、されば活きた人間の學問と云ふは、十分に天道の法則を知ることで、之を知れば衣食住に困ることは無い、衣食住に餘裕があつて、初めて人倫の道も行はるゝもので御座る

富田　御教悔によりまして、日々眞の眼を開きまする

二宮　されば人道の初歩と申すはまづ天道を順に用ゐ、人間の嗜慾を達することで御座る

福住　先生の御歌に「音も無く香も無く常に天地は書かざる經をくり返しつゝ」とあるは其天道

の法則を天地から直に合點せよと云ふ事と心得まする

二宮　其通り

齋藤　例へば此水車の如きも、天道によつて流るゝ水を、人間の工風で一寸せきとめ、車を仕掛けたものと見て取る

富田　先生の學問は天地の眞理、先生の道は衣食住の潤澤、つまり利用厚生で御座いますな

二宮　●トコロが此水車だ、半は水中に在れども半は水の外に在る、此處に好く眼を著て御覽なさい、如何に天道に從へばとて、水車を取て全く水中に沈むれば水車の用は爲し申さぬ、又全く之を水外に置いても、矢張り廻轉は致すまい、天道の利用も其通り、過ぎたるは猶及ばざる別く、厚生の德は得られませぬ

三人　ハヽア成程

富田　時に先生、先頃公儀より日光神領取興しの良法を建てよとの御下命は、先生の仕法曹く世に行はるべき端緒かと、竊に喜びに堪へませぬが、先生一向に御喜なさらぬのは、何か仔細の

有る事で御座りますか

二宮　貴殿まで左様な事を言はる、か

齋藤　とは又何故で御座ります

福住　私も合點が參りません

二宮　さればで御座る、此二宮は荒地の世話より人心の荒蕪を開くのが本願、荒地の世話は骨折損の草臥儲けだ、人心の荒蕪一度開くれば、荒地などは抛つて置いても開けます、天はもう好い加減に荒地の世話をやめさせてくれさうなものだのに、何時までも土いぢりをさせるかと思ふと、チト不平も起る、それが色に出たので御座らう

富田　如何にも先生の報德道は

齋藤　先賢未發の大議論

福住　我々共では迚でも世に弘める事は出來ませぬ、先生の不平も無理は無い

二宮　報德と申せば、直に儒者の言葉で解し、我德を以て天地の德に報ずることを悟る人の少いのは困つたものだ、たとへば此水車で、低きにつくは水の德、之を巧に取用ゐて水車を工風するのが人の德、人の德を以て水の德に報いるが卽ち報德の主意である

三人　好く心得て居ります

門人一人驅來る

門人　先生此處に入らつしやいましたか、劍術の大先生齋藤彌九郎樣が御出になり、御待兼で御座ります

二宮　好し直歸宅致すと申上て下され

富田　何の御用でしようか

二宮　齋藤氏は江川太郎左衛門殿の御親友、先年江川殿に治民の話しをした時も、齋藤氏を以て依賴された、何か又江川殿の御尋であらう

齋藤　是は然樣でしよう

二宮　或は浦賀の一件かな

福住　御名察神の如しと言ひたい、確にそれだ、急いで歸りましよう

同返し　今市二宮住居の場

齋藤彌九郎、二宮尊德對座

二宮　是は齋藤樣御變も無くて結構に存じます、遠方の御出は何事で御座ります

齋藤　先生にも御機嫌克くて重疊々々、江川太郎左衛門殿より宜しく申上る、江川も先年御啓發を蒙り、初めて治民の正道を心得たと大に喜んで居ります、偖先生此邊にも定めて噂がありましたらう、浦賀表にとう〳〵アメリカ船がやつて來ました

二宮　承知致して居りますが、それは先年和蘭から申立た事、公儀でも御手配りがあつた筈、定めて廟算も立つて居りましよう

齋藤　トコロが何等の成算もない、上下共唯狼狽するばかりで御座る、江川氏も甚だ心配致し、ソツと先生の御見込を聞いて來てくれよと頼まれました

二宮　中々以て我々の考へなどを、申述ぶべき事柄ではありませぬ

齋藤　其御遠慮は御尤も、然し江川氏も承知の事で御座れば、何卒御洩しを願ひたい、オ、此處に江川氏から先生への手紙が御座る

二宮　（手紙を披見して）左樣で御座るか、然らば愚存を申しましようが、全體彼の求める處は何で御座いますか

齋藤　和親を結び、米國船へ薪水食料を給與する事、漂流人を互に送り返す事で御座る

二宮　四隻も軍艦を派して、只それだけで御座いますか

齋藤　然樣

二宮　是は中々思慮深い對手ですな、和親通商と申すべき所を、唯和親とのみ申すのは餘程我國の內情を調べ、よく知つて居ると見ゐます

齋藤　それです、若し和親を拒むときは、萬國交際の道に外れた暴國として、戰端を啓く底意と存じまする、ウカと打拂は出來ませぬ

二宮　其所で御座います、彼は二段にも三段にも偏へ、結局通商貿易を求むるので御座いましよう、彼から先手を打たれたるは残念なれど、通商貿易は天地間の正道、我國上古神功皇后の三韓征伐も、何咎も無き隣國へ亂入致したのでは有まい、彼は金銀の多き國、我は木材の多き國大方我國から通商を求めて拒絶されたから、據無く征伐したので御座りませう、凡そ世界中人間の住む所、交易なくしては繁榮は致しませぬ、早い話が山の材木は足なくして海に入り海の魚類は泳がずして山に登る經濟の道は奇々妙々なもので、互に有無を交換するから、貨財も動きます、近頃西洋人蒸汽船なるものを明し發一刻に十里も廿里も走ると申せば、地球の表面は昔の十分の一か廿分の一に縮まつた道理、和親通商を求めて人民の衣食の道を開きまするは、當然の義と存じます

齋藤　我等も然樣に存ずるが、大聲俚耳に入らずで、世人は唯外國人を夷狄と唱へ畜生と呼び、兎ても頑固で手が附られませぬ

二宮　公儀に於て此際斷然たる御大策が無ければ、恐れ乍ら一大事變を生じましよう、私方には常に諸藩から、百人ばかりの門人が出入致して居ますから、天下の形勢は掌上に見るが如くで御座ります、薩摩の島津侯などは既に琉球に於て貿易御開始の用意をなされ、大船建造の儀も御許しを取つて居られる、承はれば今の薩摩守樣は蘭癖とまで綽名のある御方、御國元の鹿兒島では大砲小銃も御造りになるさうで、或は天下は薩摩侯の指揮に從ふの日あるかと存じまする

齋藤　江川もそれを恐れて居るが、何を申すも公儀の御金詰まりでな

二宮　さうで御座いましよう、武士の驕りは天下の疲弊、其弊を矯めんとしても制度を改めねば結局小刀細工、何の甲斐も有ませぬ

齋藤　方今諸侯では何處が一番金力がありませうな

二宮　大藩では薩摩、肥前、長州、土佐で御座りましよう、然し大藩と申しても知れたもの三都の金貸共を味方にせねば大きな働きは出來ませぬ

齋藤　此節貿易論の分るものは誰々であらう

二宮　信州の佐久間象山、肥後の横井平四郎は御承知、水戸に鶴峰彦一郎と申す人がをります、

又井伊家の中川錄郎と申す人も立派に論の立つ人で御座ります、それから公儀の勝麟太郎殿其外は私如き田舍者は知りませぬ

齋藤　有難う御蔭で拙者の腹も確り極つた、江川氏も御喜びであらう

二宮　先んずれば人を制するの諺、彼の和親を御聞屆になるは勿論、此方より人物を派し、西洋各國の物產を調べ、此方より通商貿易を申出し、富國の大道を講じたいもので御座いますが、是は今日机上の空論でしよう、然し遲かれ早かれ開國通商を行ふは天道、此二宮は二三十年れ後れた、齋藤樣は御若いから面白い世の中を御覽にならう

齋藤　面白いどころか現今最も不愉快な世の中、どうなるか分りませぬ

二宮　いや屹度面白くなる、日光神領の御世話をしながら靜に此の田舍からの都の有樣を見て居りまよう

齋藤　先生のやうな人が御老中に有つたらと思ふが是非も無い

二宮　御老中に烟草の吸殼を掌で轉がすやうな御方は有りますまい、ハ、、、、

齋藤　昔は隨分有つた、筑前の大夫小野和泉は若殿が栗のいがで山道が通れぬといふたら、何栗のいがは刺さるものでは御座らぬというて掌に乘せて打碎いた

二宮　亂世にはさう云ふ人が出る、然し齋藤樣松平薩摩守樣に目をつけて御覽なさい、屹度何がなされるものと見まする

齋藤　さうなると幕府は危ないのですな

二宮　危なくても日本さへ興れは宜しい、小の蟲大の蟲です

齋藤　先生あまり大きな御聲です

二宮　齋藤樣私がなんぼ大きな聲でも、江戸まで聞ゑますまい。

翁曰、松明盡て火の手に近づく時は、速に捨つべし、火事あり、危き時は荷物は捨てゝ。逃出べし、大風にて船くつがへらんとせば、上荷を刎べし、甚しき時は帆柱をも伐るべし、此理を知らざるを、至愚と云ふ。（二宮翁夜話）

偉人の追想

（大正十五年十二月十一日 大阪時事新報社説）

土屋元作

數日前二宮宗宣傳熱心の人々が尊德先生七十年記念講演會を大阪中央公會堂に開いた。我輩も小閑を利用して傍聽に行つたら、恰ご留岡幸助氏の講演中で、幾多知名の人々が報德記を讀んで感動し又驚嘆し、世には此の如き偉大なる人物もあればあるものゝ其教訓に隨喜し、或は世界の人々に尊德先生の言說事業を紹介せんと、英文を以て其傳說を著作した例を語つたが其中には二人の外人宣教師もある。氏は其名を擧げて聽者の注意を喚起し來り、其聲を張り上げて「諸君、此人々は耶蘇教信者であります、二宮先生の雄大なる事業及び精神に感ずるものは、内外人を問ひません、耶蘇信徒にしても既に此の如くであります」と言うた。實に留岡氏自身が極く古い耶蘇教の信者で教壇に立つ人なのである。

二宮金次郎尊德先生は、手早く申せば日本の舜である。小田原在の一農家に生れ、田畑の間に

生長したのみであるが、貧を轉じて富と爲し、禍を變じて福となし、怠惰者を化して精勤者と爲し、悲觀者を導いて樂觀者たらしむる術に於て、古今獨歩の伎倆を有した。所謂其居る所一年にして邑を爲し三年にして都を爲すの大德で支那流に人品を分類すれば聖人の部に屬する人である

ローマには奴隷にして敎を百世に垂る、エピクテタスがあり、米國には川船の船頭から起りワシントン以上の偉人と言はる、リンコルンがある。人間の智德は天禀ばかりで無く自己の修養を加ふるに由つて增大するものであるが、尊德先生の如きは卽ち其兩方共に第一等に位するものである。然し不幸にして階級制度の化石狀態に在つた德川末紀に生れた爲に、其大德を十分に發揮するの地位に置かれず、剩へ嫉妬迫害によつて其事業を妨碍せられ僅に其大經綸の一小部分を行ひ得るに過ぎなかつたのである。當時の小田原侯は賢明の譽高かつた大久保忠眞であつたが、身分の懸隔せる爲め親しく二宮と談話することも出來ず、之を登用せんとすれば頑冥なる家臣等に邪魔され、憾を齎らして地下に入つた。然し此人は百姓金次郎が日本の舜であることを知つて居た其證據は或時侍臣に向ひ、我等は幸福である、太平の世なればこそ、殿樣と仰がれて尊大に生活をするを得れ、若しこれが亂世であつたなら、彼の栢山村の一農夫の前に平伏して其命を聞かねばならぬ事になるのであらうと。當時の世が昔の支那の如く自申であつたら、忠眞は必ず堯を學び小田原十萬石を二宮に讓つたであらう。

斯る興國治世の大思想家大實行家が日本に有るに氣付かず、支那の古書を讀んで堯舜の事蹟に涙を流す漢學先生が稻麻竹葦の如く日本に充滿し、朱子であるの古學であるのと言ふて居たのは迂濶千萬な話であつたが、今日の新しい儒者先生も、マルクス、エンゲルスあるを知つて二宮金次郎あるを知らず、西洋の社會を目標に議論を吐いた西洋學者の糟粕を嘗め、日本の米よりも美味しとする人が、矢張り稻麻竹葦の如く繁茂して居る。二宮先生が十四歲にして救貧の大志願を起し、二十歲にして自己の勞力によつて父祖の舊業を回復した經驗から「人は皆天照太神と共に赤裸々しにて此土に降生したものと思ふべし」と云ふ大思想を叫び出されたのを味ふて見ようともしないのは、蚊の泣聲に耳を聳てて、雷聲の頭上に響くのを知らぬやうなものである。腐儒は決して漢學先生に限らぬ、腐敗を醱酵と改め、儒者を博士と改稱しても醱酵先生は依然として國

中に充滿して居る。

二宮先生の思想は獨創であり、又非凡である。然し其事業の働きに就ては亦自ら啓發せられる所があつた。それは卽ち信州松代の藩政を改革し、三年先の租稅までも百姓に前借したと云ふ貧乏藩をば國中稀有の富裕藩にした岡田李民親の經濟法である岡田氏の手際は日本統濟叢書中の「李政談」に略記してあるから就て見られん事を望むが、其經濟立直しの骨子は正直と興業との二つである。正直は官民の間に信義を確立し、興業は遊惰の人を變じて勤勉の民とならしむるものである。岡田氏は又富國策を實行するに當り、先づ全權委任の制を建立し亦能く反抗者を感化して逆まに其才を利用した。二宮先生は岡田氏の事蹟を記す「日暮硯」卽ち李政談を讀んで此骨法を會得活用したのである。

二宮先生は知恩院の鈎鐘の如し、指で彈いても鳴り、撞木で突いても鳴る、其叩く物の大小によつて大きくも響けば小さくも響く、報德宗を以て農家の經濟法とし、又は勤儉貯蓄のすゝめとするものは其叩く物が小さいからで、小さく響くが故に俚耳に入つて都耳に入らず、何か爺むさ

き儉約の敎を鹿爪らしく說立てるものと思ふ人が多く、味はれずして先づ人に輕蔑せられる。是素より聞く人にも失はあれども、飜つて其說く所の人を見れば、大抵は二宮先生の大思想を解せざる野夫の輩で、毫も濟世の活作用無く、又活辭をも有せず、己が小智小見にまかせ、固くるしき事を窮屈に述べ立つるばかりである。而して其隨喜して行ふ所も儉約の如き小道にして、天下を富有ならしむるの大道に非ず、留岡氏曾て我輩と此事を語り小廉曲謹二宮宗の腐儒とも稱すべき者が却て世人をして先生を嫌はしむるもの多きを嘆じた事がある。

尊德宗にも宇宙哲學は有る、然し尊德先生の大活眼は、自然界と人間界の利害衝突を見た事で自然道と人道とは同じ軌道を步まぬ自然道は人に可なる事もあり不可なる事もある、故に人間は自然の法則に從ひ、自然を修補して自己の樂地を造り出すべしと云ふ事が第一。次に自然界の法則は順環無端、陳腐は化して新奇となり、新奇は又變じて陳腐となる、人間若し順環の理を知れば、世界に廢物は無しと云ふ事。又次に富は自然物に人間の智德を加ふるによつて生ずるものである、人間の智德減すると共に富も亦自ら減すると云ふ智德經濟論である。從つて報德と云ふの

は人間は自然界から受くる恩澤卽ち自然の力を逆にし、人間の智德を以て自然界の現象を贊美し恩を自然界に施すべし。然すれば其德は又順環して人間に報い來るに相違なく、天人の間に報德の交換を繼續し以て人文の赫々を致すべしと云ふことで、之を推し擴めて人事に及ぼせば、社會に報德の大渦流を起さしめることになる。英人某氏がロータリヤン尊德と讃嘆した理由は卽ち其處に在る。

故に尊德先生の道は、儉約して金を餘しそれをチビ〳〵使はうなどと云ふ如きものでは無く、分度推讓は報道の一方便で、社會共榮が眞の目的である。先生は無利子の金を貸した、是は往々にして恩を賣り人を懷ける手段なるかの如く誤解せられる。或法學博士は二宮は政治家的術策家である、故に予は之を嫌ふと言ふて居るが、無利子の金は尊德先生にして始めて好く貸し得るもので、之を以て金錢貸借の正道とするものではない。尊德先生は難村の興復人心改善の役目を持つて居た、故に無利子の金を貸すが、其利子は其借主の報德行爲である、經濟的行爲である、彼が元金を正しく返却する時は、卽ち其田園の美はしく耕耘せられ、家庭團欒親和し、子女は敎育

を受けつゝある時である。無利子の金は慥に社會に其利子を納めさせて居る。其利子は暫く貸主の手には歸して居らぬが、軈て其德を與へるのである。尊德先生曰く「我道は治者の道なり」と彼は其委託された救貧事業を行ふ時は治者であつた。治者の取る利子は社會の福利であらねばならぬ。

二宮先生の主義は徹頭徹尾心身の勤勞である、其實行も亦徹頭徹尾其所に在る。彼が小田原侯から難村櫻町を救ふべく命ぜられた時、何程の資金を要すやとの問に答へて「一文の資金を要せず、荒地は荒地の力を以て興すべし」と言つたのは世界に於ける尤も偉大なる文句の一である。更に又彼が幾多の困難なる村里を救ひ、土塊を變じて黃金と爲した後、日光神領地の興復を命ぜられた時「我は人間の心の荒廢を興復せんと志すのに、人は猶我に求むるに田園の興復事業を以てするか」と嘆息したと云ふのは其志望の如何に洪大で有つたかを窺ふべき逸話である。我輩が彼を稱して日本の虞舜、リンコルン、エピクテタスとする所以卽ち其所に在る。

彼の傳記及び垂訓の主なるものは「報德記」「夜話」の二書である、然し是も其著者富田高慶

福住正兄の叩きたる鐘の聲である、近年彼の遺著が其嫡孫尊親によつて出版せられた。之を讀めば頗る圓熟した後年の根本思想を窺ふに足るが、彼の得意は掌の中の鍬胝に在つて、指の先の筆胝では無い、我等は彼が壯時人の論語を讀むを聞いて「ハ、ァ唐の聖人もさう言つて居るか」と言つた言葉に、活きた日本聖人の聲を聞くを喜ぶものである。

ロータリークラブ以前の大ロータリヤン

大夢

上

此一篇は昭和三年十月一日から東京に開かれた太平洋沿岸ロータリークラブ第二回大會の席上、大阪ロータリークラブ會員として英語で演說した所を自分意譯したもので、二宮尊德の教訓とロータリーの信條と相一致することを說いたものである。

千九百二十一年（大正十年）の九月私がロータリークラブの一會員として米國を旅行中、テネッシー州ナッシヴイル市のクラブから會日に數分間話をして呉れよと賴まれて同所に參り、二宮尊德の話をした事があります。尊德先生或日一門人の溫泉に入浴の際、其門人に向ひ「是れ見よ此湯の水を我方へ搔けば向ふへ流れ、向ふへ推せば却て我方へ流れて來る。早く搔けばます〳〵早く流れて來る。是が卽ち天理と云ふものである。仁義なぞと云ふ事も、平たく言へば此湯を向

ふへ推す事で、不仁不義と云ふは此方へ掻く事である。人間の手の形は禽獸の手の形と違ふ禽獸の手は、唯手前へ掻くことが出來て向ふへ推すことが出來ぬ。人間の手は掻く事も推すことも出來る、故に人間の道は禽獸の道と違はねばならぬ。何でも好い事を手前に掻き取らうとすれば、人間變じて畜生となるぞ」と申されました。此一小話はナッシヴィル・クラブ會員に日本ははに二宮尊德と云ふ人があり、ロータリーの信條と同一の教訓が早くから存在したと云ふことを告げ知らせ、大に喜んで貰ふたことがありました。

二宮尊德の生涯は、他人の難義を救ふために己を犧牲にしたものでありました。尊德先生は四個の善行を人に教へられました、それは誠實、勤勉、經濟、推讓であります。オックスフォード大學の哲學者カーペンター先生は尊德先生を評して「古色蒼然たる日本の傳統的宗教道德の中から、不思議なほど現代風の社會奉仕的思想が生れた」と言はれました。然し尊德先生の宗教は傳統的なものではありません。或人が先生に、貴君の宗教はと尋ねましたら「我宗教は神道一七、儒佛各半七づつを加味したものだ」と答へられましたさうです。

尊德先生は「自然を活讀せよ」と云ふことを門人に教へられました。自然を活讀して其法則を知り、其德に報ずるのが二宮流であります。先生は又順環と反動とが天則であることを見られまして、與へて取れと云ふことを教へられました。「人若し何か欲する所があるなら先づ他人の爲めに働くが好い、然うすれば必ず人に報いられて其望を滿足するであらう」とは、尊德先生の垂訓でありました。

此非凡の大人物は、千七百八十七年に生れ、千八百五十六年に死なれたのでありましたが、疑ひも無く先生はロータリークラブ設立以前のロータリヤンでありました。先生は好人物で甚だ貧乏なる兩親の子として生れ、然かも少にして早く孤兒となられました。先生が困難缺乏の中に生長せられた事は、恰も彼の米國の名大統領リンコルンの如くでありましたが、其大度寛仁の美德も亦リンコルンの如く困苦缺乏の中に進歩したものであります。先生が「苟も我に救を求むる者あば必ず之を助けん」との大願を起されたのは、僅か十六歳の時でありました。先生の生活は人の捨た荒蕪地を獨力で開拓する所から初まり、勤勉儉約の力によつて次第に獨立の農民たる資產

を作り出されたのであります、而して其勞作の間にも、困窮の人を見る毎に力を盡して之を救濟せられました。先生は澤山の諸侯から仕法傳授を求められたが、曾て一文の報酬も受けられませんでした。或時門人に向ひ「國家の政治を爲す人が俸祿を受くると云ふは不思議である、昔時國民を導いて人間の大道に進むことを敎へられた神樣達は皆自己の義務として政治を行はれたもので、決して俸祿の爲では無かつた」と言はれた。先生の神道と云はれるのは土地を拓き貨財を殖すこと、儒道は社會の爲めに力を竭くし、佛道は慈悲を行ふものと云ふのであつた。

中

尊德先生は自から農業に從事しつつ、其活眼で天理天則を觀察せられたものに相違無く、自然の法則の儼呼冒すべからざるものなる事を繰返して說かれました。然し同時に亦其天則は、人間の智識と工夫とを以て、人間に都合好く利用されるべきものなることを看破して居られた。卽ち「人道は天道を修補して用ゐるものなり」とは其悟りでありました。先生曰く「天道は公平無私、草木禽獸人間の差別をせぬ、人道は然らず、人間の幸福を以て標準とし、天道の我に可なる所を擇んで之を採るのである。人道は天理に從つて天道を利用し、且つ其德に報いるものである天道には順環の法則がある人若し之に從ひ、人を先にし己を後にすれば、其報は必ず自分に廻つて來るものである」と云はれた。千九百二十六年（大正十五年）五月卅一日東京のロータリークラブ例會席上、アーネスト・クレメント博士は「ロータリヤンとしての二宮尊德」と題し、專德先生の順環說と推讓の敎がロータリークラブの主義に一致することを述べられました。博士はロータリー卽ち廻轉式と云ふ名稱からして、二宮宗に緣故あることを指摘し、アームストロング博士の書かれた二宮先生の傳記「黎明前」に「植物は種から芽を出し、花を開き實を著け、再び又種に返る」と云ふ先生の語を以て萬物廻轉の法則を敎へたものであるとの文を引き、又同書に「人間の一生は水車の如く半ば水に入り半ば水の外に在るを可とす、水車の廻轉するや、半ば水に順ひ半ば水に逆ふ、若し水車を全然水に沈め、若くは全然水外に取出せば、全く其用を爲さず」とあるを引いて二者の一致を證して居られる。然し此水車の譬はアームストロング博士の英譯少し不十分で、尊德先生の意を讀者に傳へざるかと思はれる。先生の意は、世の俗物が聖賢の敎を聞

かず、其慾情の動くまゝ行動するのは、恰も水車が全部水中に沈んだやうであり、又漫に思想の高尚を貴び浮世の外に超然たる如き人物は、水車の全部水を離れた如く、共に社會の用を爲さぬものである、人道は其中間に在りと教へられたのであります。

クレメント博士は、更に進んで先生の推讓說がロータリの奉仕に一致することを述べ「二宮先生は自己を後にする奉仕の行の貴い事を强調せられ、其奉仕を好くする爲に、自己を砥礪すべしと言はれた、二宮宗もロータリーも、共に自己を奉仕の道に捧ぐべき事を勸めるが、二宮先生は幼少の時から常に一般社會の爲めに竭さんと務められた。先生が其主人から與へられた僅少の報酬を割き、居村の堤防上に松苗を植ゑ、出水の豫防に宛てられたが、其松は今現に鬱蒼として繁茂し恰も先生の生ける記念碑となつて居るのである」と人は云ふであらう、先生の如き生涯は尋常人の手本にはならぬものだと、如何にも其通り、先生も實はそれを好く知つて居られた。或時門人に向ひ「予は我藩主から難村興復の事業を委囑せられた時、直に自家の興復事業を衆家の興復事業に換へやうと決心した。人間は時として小を棄て、大を取らねばならぬ場合に遭遇するものである、予は卽ちそれを爲した」と。

下

クレメント博士は又、「二宮夜話」の一節を引き、二宮宗がロータリーの信條の第四條「交易に從事するものは相共に利すべし」に好く一致すること述べられた。二宮先生曰く「商人も權議の法を守らねば決して繁昌せぬ、賣る者買ふ者共た喜ぶのが我道である、賣買する者の一方だけ喜ぶやうな事は眞の商賣では無い」と。先生又或若者を戒めて「汝は商賣人にならうとするか、それを好い事である、然し商人になるなら眞の商道を心掛けねばならぬ、眞の商道は己獨り利することを考へぬものである、眞の商道によつて勉强すれば、行々必ず成功するに相違無い」と言はれた。

アームストロング博士が尊德先生の道を評したのは面白い、曰く「先生の道は高き處を削つて低き處に平均させるので無く、低き處を高めて高き處と平均させる流義である」と。今やカールマルクス及び其徒の主張する方法卽ち高い處を削つて低い處と平均させる流義の流行するに當り

それと反對の說を以て、鋭鋒を少しく鈍からしめるも亦頗る必要な事であらう。

尊德先生はロータリヤンと同じく社會の平和を熱愛されました。吉本氏の英文で書いた「日本農聖」に先生が或村の紛擾を圓く治められた事が記載されてある。其紛擾の起りは或村長が村の財產となつてゐた米穀を私消した事で、村民は將に官廳に出訴せんと騷いで居つた時、先生は其中に入り、法廷に出訴して村長を罰した所が、失はれた米穀の戻るにも非ず、却つて錢を失ふであらう、それよりも一同協力して村內の荒地を開拓したならば、其損害を償うて餘りあるであらう、若し諸君が自分の意見を用ゐらるゝならば開拓に入用の資金は自分が用立てゝやるが如何であると言はれた。村民等感心して先生の說に從ふ旨を答へた處、村長は之を聞いて大に愧ぢ、五年間其俸給を事業費の中に寄附するから、罪を免して貰ひたいと申出でた。村民は大に喜び、先生から元手を借りて荒地開墾に從事したら五年の後には舊損害の全部を回收したのみならず更に大いなる利益を得たと云ふ事である。私の思ふに此二宮流を總ての爭に應用したら世の中に喧嘩は無くなる。又之を國際の物言ひに應用すれば世界に爭鬪の跡を絕ち、協同協力の美事は到る處

に起るでありませう。

諸君、我々は世界一面、我ロータリークラブの迅速なる發展を誇つて居ますが私は其原因全くボール・ハリス氏の提唱した主義主張が人心の機微に觸れたものであると信ずるのである。畢竟ロータリー宗は人間天然に備はるもので、それがハリス氏の打つたキーに應じて、微妙の音樂を奏しつゝあるものと存じます。尙ほ又世界各國昔時からロータリーと同一臭味の敎訓が存在して居たのもロータリークラブの迅速なる蔓延を資けたものと存じます。現に先年我々名古屋ロータリーの發會式に參列の爲め同市へ參りました節、會長伊藤氏から名古屋には八十年前から、ロータリーに類似する會合が繼續されて居つた事を承つた。今私が御話した尊德先生の敎も亦然りであります。終りに臨み私は申したいロータリー精神なるものは、恰も地下水の如きもので、何處でも地を掘れば必ず之に到達し、之を飲む者をして爽快無比の感を有せしめるものであると。

翁曰、大道は譬ば水の如く、善く世の中を潤澤して滯らぬ物なり、然程に尊き大道も、書に筆して書物となす時は、世の中を潤澤することなく、世の中の用に立つ事なし、譬は水の氷たるが如し、偖此氷となりたる經書を、世上の用に立つるには胸中の溫氣を以て能く解かして、元の水として用ひざれば、世の潤澤にならず、實に無益の物なり。（二宮翁夜話）

昭和六年四月四日印刷
昭和六年四月四日發行

著作兼發行者　大阪府豐能郡豐中町四百二十五ノ一　土屋元作

印刷所　大阪市東區北濱五丁目　藤本ビルブローカー銀行印刷部

終